
忘れられた物語 † The forgotten story †

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられた物語 + The forgotten story +

【Nコード】

N4251N

【作者名】

のりまき

【あらすじ】

『最高』と『最強』の間に戦いがあった。

それは世界を終わりにへと導いた。

『最高』は大地を腐らせ、『最強』は水を濁らせた。

人の心は輝きを失っていた。

希望など微塵もない世界。

そんな世界に強い心を持った、『最上』が現れた。

『最上』は戦い、その末、世界を平和へと導いた――

詩人が語ったそんな物語も、世の中が平和になるにつれて忘れられ

ていった。

時に人は、忘れた物語と、同じ過ちを犯すのだった。

「心には救う力もあれば、滅ぼす力もある。どう使うかは、お前次第だ」――

これは、人々から忘れられてしまった、心が紡ぐ物語。

記憶——悲しみと怒り

血……血……血。

爪と牙に引き裂かれた多くの亡骸からは、溢れんばかりに赤い液体が流れ出ている。

地面は血で赤黒く染まり、本来の大地の色はまるで見えない。地面も、私の服も、春になると白い花を咲かす草花も、返り血で赤黒く染まりきっていた。もやは元が何の色で、どういった模様をしていたかなんて知らない人が見たら見分けがつかないだろう。

手、足は既に肌色では無く赤く染まり、自分では見えていないが恐らく顔も真つ赤な血の色を浴びていただろう。

そこに、私一人だけが立っていた。目の前には、二組の爪と牙。血を求めるだけの存在。気味の悪い唸りを上げると、風を切るような勢いで私に向かって来る。血に飢えた唸り声。爪と牙には心なごない。ましてや同情という心も無い。あるのは血を求める欲望だけ。

地獄という世界が、正に目の前に広がっていた。

既に正気なんて物は吹き飛んで、狂いに狂ったわけのわからない感情だけが身体を支配していた。

私は混乱する意識の中で、近くに落ちていた刀を無我夢中拾い、力の限り斬り上げた。

標準が全く定まっていないう刀がその爪と牙に傷を付ける事が叶う訳も無く、私が残る力を全て使って振り上げた刀は虚しく空を斬る。だが爪と牙は手を緩めず、私の命を狩り取る為に襲いかかって来る。

もうそれが虚像なのか、実像なのかは、分からなかった。

——ただただ、恐ろしい

——ただただ、怖い

——死にたくない、死にたくない

私の頭に、様々か感情が一度に流れ込んでくる。もう自分でそう思ってるのか、思わされてるのか、全く分からない。自分という存在が内側から狂っていく。

何か冷たい物に引き裂かれる不気味な感覚が、背中にぞくりと走る。逃げる力など残っていなかったので、それから逃げる事叶わず全てを受ける以外に選択肢は無かった。だが、意外なほど痛みは感じない。いや、感じる余裕などなかった。代わりに感じたのは……

決して勝てない、殺されるのを待つだけの恐怖。

全てを失う、絶望と悲しみ。

怒り。

私は、世界が暗転してしまう直前、悪に埋め尽くされた負の感情で頭の中はいっぱいだった。

死んだと思った。次目が覚めれば、既に私はこの世にはいないで、天国か地獄か、それともどちらでもない無の空間にでもいると思っていた。むしろ、そのほうが楽だったかもしれない。

だけど、運がよかったのか悪かったのか。私が死ぬことはなかった。

その後の記憶は……曖昧だ。

唯一覚えているのは、血と亡骸の海の中で、鼓膜が破れんばかりの大声で叫ぶ自分の声。

悲しみが籠った、その思い。悲痛の叫び。

そして、見る事も叶わなかった首謀者への怒りだった。

プロローグ

——人は誰もが『心』を持って生まれてくる

——時が経につれ 外への探究と信じる心が芽生える

——やがて勇気を振り絞り 旅路の一步を踏み出す

——そして旅の中で愛する物を見つける

——その物を守るために人は力を付ける

——しかしそれを失った時怒りと悲しみが生まれる

——それが静まった先に 希望が生まれる

——人はこの心の先に何を見るのか……

？
†？
†？
†？
†？

「ねえおじさん。何してるの？」

温かい陽光の照らす切り株の上に座っている詩人に、少年は無邪気な声で話しかける。思い出すようにして唄を詠^{うた}っている詩人はそれに良い反応は示せず、顔にしわを寄せながら、ああ？ と、喧嘩

越しに返事をする。だが、少年は恐怖を知らないのか、それともただの世間知らずなのか。質問を立て続けに繰り出してくる。詩人は何度も追い払おうとするが、結局その可愛さ故に相手にしてしまう。

「だから、何やってんの？」

「待て待て小僧。まず、俺はおじさんじゃない。お兄さんと呼べ」
「分かったよ、おじさん」

少年は全く男の要求を飲んでいなかった。純粹なのか、それとも物分かりが悪いだけか。

その少年曰く、“おじさん”の詩人は、呼び名を変えさせる事を諦めて話を進めた。一人で詠^{うた}つていてもしょうがないので、こんな生意気な子供でも少しは相手にはなると思い初めて来たからだ。孤独な吟遊詩人の性である。

「俺は物語を詠ってたんだよ。どうだ、聞きたいだろ？」
「面白いの？」

少年は好奇心旺盛な声でそう聞いてくる。謡う側としては、面白いの？ とか、楽しい？ と聞かれれば、面白い！ と喜んで回答するのが普通なのだろうが、男は曖昧は返事を子供に返す。

「かも、な。まあ、とりあえず聞いてみる」
「まあいいや。暇だし、聞いてあげる」

生意気な口調でそう言つて、少年は近くの木に腰を下ろした。その上から目線な態度に、一瞬殴り飛ばそうかと男は思ったが、拳を背中の中で押さえる。

見れば、子供は何だかんだで聞く気満々である。結局は素直でないだけなのである。

詩人はしょうがないと思いつつも、豎琴で美しい音色で奏を始め、物語の冒頭を先ほどの声からは想像も出来ない美声で語り始めた。

遠い昔……と言つても、あくまでこれはお決まりの冒頭だから、気にするな――

違う世界の出来事かもしれんが、まあ、そんな事はどうでもいい

――
いつかは誰もが知っていた、子供からじいさんまでな――
でも忘れられた、理由は分からない――

さて――

じゃあ、始めるか――

これは心の物語――

人の、心が世界を動かす物語――

序章【？】 始まりの風

「ん……？　ここは……どこ？」

一人の少女が、冷たい夜風に吹かれて目を覚ました。

森は既に夜の闇に包まれ、空には星と月が輝き、耳を澄ますと虫と鳥の鳴き声がだけ聞こえる。風が吹く度木が会話するようにざわめき騒ぎたてる。だが、それは人が住む町とは違う、どこか静かな空間。

その横で、とある青年が黙々と火を焚いていた。

髪は茶色で、ツンと立つたくせ毛が目立つ。目には緑色がかかっていて、くつきりとしている。右腕には美しい細工が施されている銀の腕輪をしており、傍らには特徴的な形の剣が置いてある。だが、剣は合っていても、その高級そうな腕輪は、青年には不格好だった。

「お、やっと気がついたか。お前、魔物を追っ払った後、ぶっ倒れちまったんだよ」

青年は、たき火がパチパチと音を立っている隣——毛布に包まれて横になっている少女に話しかけた。

少女の髪は、長髪でエメラルドの綺麗な色。今は崩れてしまっているだけだろうが、前髪にはただの飾りになっている赤いヘアピン。耳には紫に輝く宝石のイヤリング。目は澄んだ青色をしている。

少女はゆっくりと——押し倒してしまえば抵抗出来ないだろう程に——幼く小さい体を起こすが、小さな悲鳴を上げて倒れかける。

「つつ！」

「おいおい、怪我してるんだから無理すんなって」

地面に引き寄せられる少女の身体を、青年は背中に手を当て受け止める。

丁度というか、たまたまというか、いい具合に二人の顔が息のかかる所まで接近をする。

「あ、ありがとう」

「え？ あ、ああ……」

目で見つめられながら、初めて顔と顔で会話した少女は、綺麗な声をしていた。

その綺麗な声の、いくつか年下の女の子に青年は今更ながら顔を赤らめる。いままで意識してなかったのだが、思えば寝かせるために抱きかかえたり、手当をしたりというのを今更ながら思いだしてしまい、恥ずかしく思ったのだ。それを隠すように、少女の身体の体制を建て直した後、たき火のほうへ体を向けてしまう。

告白しようと面向かったにもかかわらず、何も言いだせない。そんな気恥かしさを露にしまった肝心な所で度胸の無い、男の情景を連想すれば丁度いい。

「どうしたの？」

「い、いや火が消えそうだったんでな」

青年は動揺しまくりの、揺れた声でそう言った。

不思議に思ったのか、少女は包帯が巻かれている右肩を抑えながら、青年の隣に体を動かし隣に座る。そのせいで、青年の心臓の鼓動は早くなり、顔は赤ワインのように真っ赤になっていた。普段はこんな事にはならない青年だったが、暗がり知らない少女と二人

きりになってしまったせいか、何故か今だけはそう興奮してしまっていた。

幸い暗がり、青年の表情に少女は気付かないようだが。

「火、全然大丈夫じゃない。それにどうしたの？」

少女は青年と全く逆で、全く緊張していない。元々緊張しないのか、それとも鈍感なのかは分からないが、青年としては後者でいてほしかった。気づかないふりをされているのは嫌だったからだ。

「……名前は？」

「え？」

自分が動揺している事を誤魔化すように、唐突に青年は言った。揺れた声で。今は誰も居ないが、第三者から見れば、全く誤魔化せていない。むしろ、動揺している事がまる分かりである。

「名前だよ、なまえ。まだ聞いてないだろ？」

「そういえば……確かにそうね。私はシャイナ。シャイナ・トールギスト」

青年はその名前を聞いて、さらに心臓の鼓動を早める。

それを紛らわすかのように、青年は口を開く。

「俺はリックだ。リック・レーランス」

「リックね…うん、よろしく」

「ああ」

お互いの自己紹介が終わり、何とも言えない雰囲気になる。

それを焦らすように森の木々が風で揺れ、静かな森に木のざわめ

きが響く。

その風に、シャイナのエメラルドの髪が横に靡く。

その姿は髪の色が焚き火の明かりでほんのり照らされていて、どこか神秘的で、美しかった。その雰囲気ので、普段は全く無いこの緊張があるのだとリックは悟り、心の中で自分を笑った。

リックは見惚れていたが、シャイナが口を開いたため、思わず視線を反らす。というか、逸らすという選択肢しか、女を口説くなどという高度な技を身につけていないリックには、これしかなかった。そもそも口説こうなどとも考えてはいないのだが。

「風の音、聞こえるね」

「ああ、まるで俺たちに何か話しかけてるみたいだ」

「何が言いたいんだろ……」

シャイナが髪を抑えながら静かにそう言つと、答えるように風はもう一度、強く吹いた。

その風に乗せられ、綿毛の付いた種が一つ、夜空に舞い上がる。種は森の木々が全て見渡せる所まで舞い上がり、そして流されていく。

種は始まり、風はそれを送る。それはどこまでも遠く、長く。その始まりの風が、いまゆっくりと森の中を駆け抜けた。

序章【?】 始まりの風（後書き）

序章【?】 出会い（前書き）

> i 1 4 7 3 0 — 1 6 0 2 <

のちに出てくる、世界地図です。見にくいですが、少しでもイメージに役立つと幸いです。

序章【?】 出会い

この世界は二つの大陸があり、その中で“五巨国”と呼ばれる五つの国と、その中の地域で分かれている。

世界の最南端、五巨国の中で唯一孤立した大陸にあり、海からの資源が豊富な熱帯の島国、レスター。

世界の東に位置するのは、沿岸部を中心に都市が栄え、内陸部は森が多い国、デイス。

世界の北、厳しい寒さを活かした独自の文化と、強靱な軍隊を持つ、ブリドア。

世界の西、温暖で安定した気候を生かした牧畜が盛んであり、広大な草原の国、フォーマス。

そして、デイスの西、ブリドアの南、フォーマスの東に位置する、国。多くの山々と、強国に囲まれた、過酷な大地のガルレット。

そんな五つの大きな国の中で、この運命の物語は東の国、デイスの森の中で起こった、二人の出会いから始まった……

?
+?
+?
+?
+?

「迷った……か？」

一人荷を背負い、孤独に旅をしているリックは、デイスに広がる広大な森の中を歩いていた。

歩く、といっても方向を全くといっていいほど見失い適当にだ。

何故方角が不明かと言うと、愛用の方位磁石が一つの方向を示せず、ぐるぐると回転しつづけているからだ。

つまりは、壊れた。

「いや、迷ったんじゃない。俺は自由気ままな旅をしてるんだ。方向なんて関係ないさ！」

現実逃避。だがそんな簡単に現実からは逃れられない。逃れる方法は、運よく正しい道を進むか、ここで飢え死にしてみようくらいだ。

地図はあるものの、方向が分からない今となってはどうしようもない。どんなに優れた地図でも、方角が無ければ、ただの黒いインクの線が描かれただけの紙きれになる。これならばまだ、自分の勘に頼ったほうが動物の本能的に正しい道を示してくれるかもしれない。

リックは実際にそうしているが、見事と言えるほど順調にきた方向に逆戻りしている。

「あーちくしょう！ 何でコンパス壊れちまうかなあ……」

そんな途方に暮れている最中、森の空気を振動させる叫び声がリックの耳に入ってきた。その声に、思わずリックは立ち止まる。

高い声——声の主は女、そうリックは感じ取った。

「遠くないぞ……。どっちからだ？」

リックは耳を澄ます。自然の中を一人で旅するには、森の中の音を正確に聞き取れるくらい出来なくては1週間と持たずに野生の食物連鎖に呑みこまれてしまう。

十秒……三十秒……一分と、時は静かに過ぎる。

やはり気のせいかと思い、諦め掛けたその時、もう一度その声はリックの耳に飛び込んできた。

今度はハッキリと、その高い声がリックの耳に入ってきた。

「こっちか！」

リックは草が生い茂る森の植物をかき分けながら、その声目掛けて全力疾走した。

？＋？＋？＋？＋？

「何なのよ、この数……。反則じゃない？」

叫び声の主、シャイナは森が開けた所で狼型の魔物——ライガの群れに囲まれていた。

口に歯がのこぎりのようにズラツと並び、足の先には不気味に伸びる鋭い爪。まさに獣、という言葉葉を顕著に現す容姿。森の狩人と呼ばれるには十分すぎるほどの容姿。

数は一二頭。一個体としては大した強さではないライガーだが、群れとなるとそういうわけにはいかない。その集団性と俊敏さを生かしたチームワークで、ナワバリに侵入した動物を攻撃してくる。

その特徴ゆえに、一人でライガーの群れに出会うのは非常に危険とされ、世界を回る旅人からは恐れられている。

「フレイム！」

シャイナは飛び掛ってきた一匹のライガーに、下級の火魔法——フレイムを至近距離で放つ。

その攻撃でライガーが焼かれ、湿った地面にドサツと音を立て、焦げた異臭と共に倒れる。が、近くまで接近を許したせいか、シャイナも右肩を爪で裂かれ、雲のような真っ白な美しい肌からは、血が滴り流れていた。

「うつ……」

シャイナは右肩を左手で押さえながら、ライガーの群れに向けもう一度魔法を放つ。

当たりこそはしないが、それに臆したか、ライガー達が一步下がる。獣の本能からか、やはり火は苦手なのだ。

だが、そんな事で縄張りに入ってきた人間から、易々と引き下がるライガーではない。リーダーらしき一頭を中心に陣形を整え、次の攻撃に移る。

一頭のライガーが、シャイナに向かって飛びかかる。反射的に本能は避けようとするにも、右肩の痛みがそれを邪魔する。よけられないと悟り、シャイナは恐怖と混乱で、無意識で反射的に目をつぶる。

だが、ライガーの鋭利な爪が目の前にまで迫った時には、シャイナの耳には自分の悲鳴では無く、誰か別の人間の声が聞こえた。

いままで聞いてきた血に飢えた魔物の唸りではない、繊細で綺麗な人の声。

「伏せろ!!」

シャイナはその声に反応してとつさに体を伏せる。

すると頭上で何かが空を切る音と魔物のうめき声、そして肉が切れる鈍い音がした。

「ふう、何とか間に合ったな……」

シャイナが少し涙の溜まった目を、恐る恐る開けると、まず一頭のライガーの無残な亡骸が目に入った。腹が切れ、そこから真紅の

血が流れ出し、地面はそれを吸って赤黒く変色していた。

そしてもう一つ目に入ったのは、一人の青年——リック。
森に響き渡る声を辿ってここまで駆けつけたのだ。

「だ、誰？」

「それは後だ。まずはこれをどうにかしないとな」

リックは手短にそう言うと、剣を両手で持ち、ライガー達に刃を向け構える。剣は腕より多少長いくらいの物で、いかにも重そうな両手剣。柄を中心に細かい傷が所々に目立っていたが、歯の部分がよく手入れされており、あまり武具の知識に長けていないシャイナでも大切に使いこまれた物なのだと分かった。

「まだ死にたきやないだろ？」

「そ、それはそうよ。分かった」

その横にシャイナも並び、まだ出血が止まらない右肩を押さえつつ、ロッドを構える。ロッドと言ってもただの杖ではない。戦うための道具、先端に霊石がはめ込まれた物である。

霊石というのは、見た目は宝石と全く同じ。ただ、宝石の中に魔力を帯びている物があり、そのような宝石が一般的に霊石と呼ばれる物である。

ただ、魔法自体は呪文さえ唱えれば使うことができる。霊石の役目はあくまで使用者——魔法使いの魔力を高める物。

使用者の能力が高ければ、それに比例して霊石の能力も引き出せる。という事は、その逆もまたありえるわけだ。

「頭数は十。どうするの？」

「リーダー核を潰せばどうにかなるだろう。援護を頼む！」

簡潔にリックは作戦を述べると、群れの中に突っ込んで行った。単純明快で分かりやすい作戦だが、普通に考えればあまりに無謀。一対二、それもシャイナは怪我をしており高い戦闘力は望めない。しかも剣を構えて敵陣のど真ん中に突撃とくる。

そんなとんでもない奇行に、シャイナは思わず声をはり上げた。

「ちょ……突っ込むなんて正気!？」

「今はこれしかないだろ!」

確かにそうだとしても、己の身で突っ込むなどシャイナには正気とは思えなかった。

それもまだ自分の為ならば理解出来る。だがリック——この時点ではお互いに名前知らないわけだが——は自分のためでなく、他人であるシャイナを助けるために首を突っ込んでいるのである。普通なら、見て見ぬフリか、逆に他人が襲われているのを好機としてその場を突破するのが世間一般の常識。

「どれだけ危険知らずなの……フレイム!」

シャイナはロッドを構え、再び火の魔法を放つ。今度は道を作る様に、2本の火線を平行線状に火を放つ。

リックに近づかんとするライガーはその火を避けて、リーダーへの道を開けた。その一瞬で作られた陣形が乱れるというチャンスを見逃さず、リックは火によって作られた花道の中を疾走する。

「危険知らずなのは昔っからでな!」

リックはシャイナに遅れた返事を返し、リーダー格のライガーに剣と眼光を向ける。

それに反応し、リーダー格が咆哮を上げると、一騎討ちもさながら正面から向き合い鋭利な爪で斬りかかる。それをリックは体勢を右に逸らしかわす。紙一重のタイミング。

その一瞬の間にリックは剣を握る手に力を込め、一気に斬り上げる。

次の瞬間には、鈍いうめき声。そして剣に斬られたライガーの血が宙を舞っていた。

「お前ら、リーダーは俺が倒した。さつさと埒はぐに帰れ！」

リックはリーダーが倒され、戸惑うライガー達に鋭い殺意さえも感じる威圧感のある目で睨めつけ、そう言い放った。

「……すごい」

シャイナはその瞬間、人とは違う鋭い感覚のような物をリックから感じた。

人の言葉を理解しているかは定かではないが、ライガー達はその迫力と威圧感に本能的に怯えたのか、森の奥に情けない鳴き声を上げながら、退散していった。

「ふう、もう大丈夫だな……」

リックはライガー達がなくなった事を確認すると剣に付いた血を木の幹にこすりつけてから鞘に終い、シャイナの元に駆け寄った。

「傷、大丈夫か？」

「たぶん……」

「たぶん、じゃないだろ！ お前、体フラフラだぞ！？」

シャイナの体はもはや自分では支えられず、リックの補佐が無ければまともに経っていられない程に不安定だった。

「だ、大丈夫……。ちょっと…疲れただ…け……」

脅威が去った安心感で疲れが一気に出たのか、最後まで言い終わらないうちにシャイナは膝を折り完全に体重をリックにかける。恐らく、魔法の乱発による疲労と精神的な疲労が出てきたのだろう。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

リックはシャイナが気を失った事に大いに焦る。だが、少々騒いだ所で深呼吸をし、冷静になる。

「寝てる……だけ？」

シャイナは心地よい寝息を立てて寝ているだけだった。表情は穏やかで、先ほどまであのような状況からは考えられないほどだった。

それにリックは胸を撫で下ろすが、それとは別の感情も感じていた。

——うっ……

よくよく見れば服の右側が破け、右肩が露になっている。ライガ―にやられた傷が痛々しいが、その美しい白い肌。髪から香る独特の匂い。リックはそんな物に本能としての何かを感じる。

しばしの間、リックはシャイナを見つめていた。

「って何をやってるんだ、俺は」

リックは首を振って下心を振り払い、シャイナを横に寝かせ軽く肩を手当てすると、毛布を申し訳程度にかけ、キャンプ——今日の寝床を作ろうと動き始めた。

作業の合間合間に小さな声を漏らしているシャイナを意識してしまい、よからぬ想像をしたのは言うまでも無い。

序章【？】 群青の剣士

「で、シャイナ。お前は何でこんな所に一人でいたんだ？」

二人はまだ少しだけ熱を放っている焚き火をつつきながら、軽い談笑をしていた。

談笑と言ってもそれなりに相手の事を知るような内容で、お互いが偶然といえど出会ったこの状況を確認しているといった感じである。

「シフランにいる人に会いに行くためね」

シフランとはディースの首都。沿岸に沿って市場が並んでおり、この大陸でも有数の活気がある巨大都市であり、同時に巨大な魔法都市としても有名である。世界中から著名な魔法使いがその身を寄せ、日々研究に勤しんでいるというのは有名な話。

ただ、ここからシフランに行くには、この巨大な大森林を越えなくてはならなかった。

「シフランか……」

「何か文句ある？」

リックは不満そうに言うと、騒ぎたてるシャイナを横目に腕を組みながら木と木の間を左右に歩く。どうやら何かを思考しているようだ。

そして突然、よし！　　と言い、続けて口早にこう言った。

「俺がお前の目的を果たせるまで、着いてってやるよ」

いきなりの提案に、シャイナは驚きの表情を隠せない。目を思わず見開いて、啞然としてしまう。

「え……？ まさか、それって本気？」

「ああ、どうせ一人旅だ。それに男一人つてのもいい加減……」
「変態」

「何だよそれ！ 下心があるってのか？」

「当たり前じゃない！」

シャイナはそれを猛烈に断るが、リックも何故こんなに引きとめるか分からないくらいに引きさがらない。どこか男としての意地が、中途半端に出てしまったようだ。

五分の討論の末、結局シャイナは折れリックと共にシフランに向かうことになった（この場合はなってしまった、だが）。

「いいじゃない！ 着いてきてもらおうじゃないの！」

半分はシャイナの開き直りだったのだが。

「よし！ 決まりだな。それじゃあ早速、どう行くかだが……」

そう言いリックは自分の荷物から年季の入った世界地図を取り出した。

それは所々シミが浮き出ており、破れた個所を修正した後もある。少し引つ張れば、いとも簡単に避けてしまいそうな、色褪せた地図。相当古い物だというのは、鑑定士でも無いシャイナの目でもよく分かった。

「随分とボロっちい地図……」

「まあ確かにそうなんだが……。ほら、世界地図って今お高いだろ？ だからコイツを愛用してるわけよ。それにこれ、ボロっちいクセに有能なんだぜ？」

この大陸では、世界地図という商品は中々値の張る物である。と言ってもここ最近の話。

理由としては、地図はすべて手書きで作られているためと、ここ数年で大きな地殻変動があったために、いままでの地図のベースが正確さを欠いてしまったことにある。

それと単純に、必需品なため高くしてもしぶしぶ買う客はいくらでもいるので値上がりしてるというのもあるのだが。

「あ……、コンパス無いんだった……」

「貴方大丈夫？ 不安になってきたんだけど……。はい、私の貸してあげる」

シャイナはリックに小さめの携帯コンパスを手渡して、方向を確認しつつ地図と照らし合わせる。

その様子を覗きこむようにして見ているシャイナだが、ここである一つの疑問に突き当たった。

「でも、古いのに正確なのって何で？ 最近、地殻変動があったんでしょ？」

「それは俺にもよくわかんねえが、どうもこの地図は魔法の類たぐいが関わってるらしくてな。地形が変わるために勝手に書き換えられるんだ」

「勝手に書き換わる？ 不思議ね」

世界広しといえども、こんな地図はそうそう無いだろう。

世の中には古来より伝わる道具や武器等が数多くある。絶対に燃

える事の無いマント、いつまでも水が湧いてくるという杯、決して折れる事の無い剣、射てばどんな的にも百発百中するという弓……。シャイナは何でこんなただの旅人が、そんな事実かも疑わしい道具に匹敵するような地図を持っているのかという疑問を持ちつつも、地図に大きく興味を持っていた。

「さて、と。じゃあシフランに向かうにはここを突っ切るのが一番早いんだが……」

リックは地図の木が生い茂る場所を指で指す。

そこは今まさに自分たちがいる森である。西は険しい山脈が並び、北には巨大な平原、南には海。そして東には海と、目的地である“シフラン”という都市名が書き記されている。

「まあ昨日の出来事じゃないが、ここん所、魔物が凶暴だ。それに食料も少なくなってる。という事で俺は森の南に抜けて、海岸線に沿ってシフランに向かうルートがいいと思うんだ。このルートなら途中にシーブスって港町がある。ただ、距離はザッと見積もって倍になるんだが……どうだ？」

「そのルートでいいんじゃない？ 魔物はもう嫌」

昨日の事を思い出したのか、疲れた表情とため息、そして右肩を抱える仕草を見せる。

「じゃあそれで決定だな。それじゃあ、出発するとするか」

と言い、リックは焚き火に水をかけ始末する。そこからたった白い煙から目を隠しながら、腰に付けている剣の金属音と共に軽快に立ち上がる。久々のとの旅の始まりに、心はかなり浮かれているのであった。

「そうだ。1つ聞いていい？」
「ん？ 何だ」

最後に髪を留めて身支度を整えたシャイナが、立ちあがると同時にリックに問いかける。リックはその声に一度振り向いて、耳を傾ける。

「何で旅をしてるの？」

そして一拍空けて「私だけ教えるのもずるい」と、一言付け足した。

リックはその質問を受けて、一瞬だけ表情を曇らせた……ように、シャイナは感じた。だがそれを確認しようとした時には、既に普通の表情に戻っていた。リックあまり関心はないかのように振る舞い、答えを返した。

「旅するのに理由は必要か？」

そう言って歩き出すリックに、シャイナは首をかしげながら「別に」とそっけなく答えるしかなかった。

？
↑？
↑？
↑？
↑？

リックとシャイナが出会ってから五日ほど経った頃、目的地の港町、シーブスまで後数時間の距離まで来ていた。

二人は朝日を浴びて、きらびやかに輝いて流れる綺麗な川に沿って歩いている。リックによると、この川に沿って行けば町に着くらしい。……のだが、全くと言っていいほどその兆しが見えない。先に続くは緑と茶色の世界ばかり。

「にしても、まだ着かないの？」

「おつかしいなあ……。そろそろ見えてもいい頃なのに」

「まさか……。道を間違えてるって事は……」

シャイナが機嫌が悪そうな口調で尋ねる。つまらない歩き旅に、中々相当ご立腹のようである。

だがリックはその問いに、待ってましたとでも言わんばかりに、自信満々に答える。

「それは無いさ。前に一度来た事があるし、地図にだってそう書いてある」

「まあ地図なら信じるけどさ。ってあれ？ 何か聞こえない？」

俺は信用できないのかよ！ と横で騒ぐリックを無視し、シャイナは耳に手を当てて感覚を研ぎ澄ます。

聞こえてきたのは水が勢いよく流れる音。そして自分の左を流れる川を見る。川は先程より流れの速さを増していた。聴覚を研ぎ澄まし、シャイナが辿りついた答え、それが滝だった。

「滝……。ね。滝があるんだわ」

「お前、よく分かるな……。俺でもなんとなくしか分からなかったんだぞ」

旅慣れしているリックは、それなりに五感は優れていると自負していたが、いかにも旅に不慣れなシャイナが、それ以上の聴覚を持っている事に驚く。こういうのは結局は才能なのだろうと、リックは思いつつも、自分は何なんだという自問自答を感じる。

リックはそんな事を思いながら、古地図をまた広げる。

色が薄れ、判別が難しい地図に目を凝らすと、確かに滝らしき物

が町の近くにあった。

「じゃあもう着くじゃない」

「そうだな……よし！」

そう言うのと、リックは勢いよく森の中を駆けだした。
シャイナもそれに続いて走り出すが、女の足では追いつけない。

「ほらどうしたあー。先に行っちゃまうぞあー」

「あ、ちよつと待って！」

二人は強くなつていく水の音にかき消されないよう、叫ぶように会話をしながら走る。

二分ほど走った頃には、シャイナは肩で息をしていた。先を行くリックは、後ろを向いて走りながらシャイナをおちよくるように応援していた。

「ほらあー、遅いぞ、って……うああああ!!」

「え？ 消えた？」

だが突然、リックの姿がシャイナの視界から悲鳴と共に消える。
少し間を開けてからシャイナはリックが消えた地点にたどり着くと、そこは切り立った絶壁の崖だった。

左手には川が滝となつて水が落下しており、前方には港町が、その先には青く光る海が広がっていた。

そしてシャイナの目の前には、出っ張っている石に右手でかろうじて掴まり助けを求めているリックがいた。

「た、助けてくれ！」

後ろを向きながら走っていたために、崖から落つこちたのだろう。必死に女に助けを求めているリックは、生まれたての仔馬のように情けなかった。

一瞬見捨てようかと思ったが、本気で落ちそうなので、渋々手を貸すシャイナ。

「全く、何やってんのよ……。ホラ、届く？」
「なんとか……」

シャイナは伸ばしてきたリックの左手を掴む。
必死で上に上げようとするが、荷物の重さもあり、リックを引き上げられない。

「全然上がらない。重いよ……」
「頼む、頑張ってくれ！ 石が抜すっばけそうだ……」

リックが右手で掴んでいる石が不安定に揺れていた。
このままだと、シャイナ一人でリックの全体重と彼が抱えている荷物を支えなければいなくなる。
片腕を持つてただけでこんなに苦しいのだ。全体重など支えられるわけがない。

「あ、ぬ、抜けるなあああ！」

逆にそう叫びながら体を無駄に動かせば、余計に抜けるという事は想像できなかったのか。リックの願望は無視され、無情に石はすっば抜けた。

だが、掴む物を無くした右手は宙を舞う事は無く、他の細い手に掴まれていた。リックが何が起こったのかと見上げると、その手の先にはシャイナとは違う、別の女の顔があった。

「だ、誰……？」

シャイナは突然現れた彼女を凝視する。

髪は夜の海のような群青色、ロングで白い鉢巻でその束を纏めている。目は深い緑色で、印象的である。

上は袖は肩までの布製の服。下は膝下までであるロング。両方とも色は琵琶のような、赤と黄色の中間のような色をしていた。

腰には刀を帯刀しており、わりかし大きめのバックを肩に掛けている。そのことから、自分たちと同じく旅をしている事が窺えた。

「それは後。ホラ、引き上げるよ！ 下の奴、大丈夫？」

「あ、ああ……。頼む」

はきはきとした声。

その謎の女は、リックに威勢よく確認を取ると両手で軽々、一気に引き上げた。それに補助され荷物を含めたリックの体は、なんとか地に激突する事無く救出された。

「あ、ありがとう……。で、何者？」

リックは彼女に助けられた事に戸惑いと恥ずかしさを表に出しつつ、訪ねた。リックを見下ろす格好になっている彼女はそれに、明るく陽気な声で答えた。その声は、随分と楽しそうで、愉快そうで、そして何より好意的だった。

「ん？ 私？ 私はアイラ。強くなるために旅してんの」

そう、群青色の髪を靡^{なび}かせながら言った彼女。これがいずれリックの好敵手となる女剣士であり、これから末長く旅を共にすること

になる彼女との出会いなのであった。

これも、ある意味では運命だったのかもしれない。

序章【？】 不思議な感覚

「さっすが港町、色々あるわねえ」

「そうね。あ、あれ何？」

ここはシーブス。活気に満ち溢れた港町である。

煉瓦れんがを基調とした道が長く伸びており、いかにも近代的な匂いを漂わせている。

市場には雑貨屋、武器屋、宿屋などが立ち並んでおり、あらゆる人という人が必要とするであろう、一通りの施設が揃っている。長旅をしてきた旅人が羽を休めるのに、これほど恵まれた町はそう無いであろう。

この国から他国に出港する船も、この港から全て出港しており、フォーマス、ブリドア、レスターまでの交通の便は完璧である。

大陸生粋の港町と言われるだけの事はあった。

「ハア……」

そんな誰もが目を輝かせる風景の中、リックはため息をついていた。

理由は簡単。何かの縁か一緒に旅をし始めたシャイナと、つい先日に出会ったばかりの女剣士アイラに振り回され、頭を抱えているのだ。

いつのまにかシャイナとアイラは意気投合し、旅まで一緒にする事になってしまっていた。反対するも、助けられた側のリックには彼女たちの意見を断る力は無かった。

全く、何であんなに強引な奴らなんだ？——と道中、口癖のように呟いていた。

「あ、これって何？」

「これは占いの道具かな。こっちは……」

二人はありとあらゆる店に周り、買いもしない物を眺めては楽しんでた。その姿は、姉妹のようで、見てて微笑ましい。が、リックはそれに子供を遊ばせている親のように、ただ後ろに付いて行っているだけだった。もはやリックの存在は、彼女たちの思考の端にでも飛んでしまったようだ。

いい加減、リックも耐えられなくなり、彼女らから離れることにする。

「俺は別ん所行ってるからなー。宿で待ち合わせだぞー」

リックは夢中になっっている彼女らに一応声を掛ける。はいはいと即座に愛想の無い返事が帰ってきたので、やれやれと思いつつリックは一人で街中を歩き始めた。

人の中に居るのが本能的に嫌いなリックは表通りを避け、裏路地を歩いていた。

ここは特に目立った場所はなく、店も疎ら。人も時々ポツポツとすれ違うだけだった。

そんな寂れた所の中に行き先があつた。それは裏通りの角にある小さな武器屋。半分が固定されてなく、『ダイダロ』と書かれた看板は傾いた状態で、いかにも古臭い感を出していた。リックはその前に立ち、扉の取っ手を手前に引く。木製のその扉は、ギキイとまた古臭い独特の音を立てながら開く。

「いらっしゃい。どうぞごゆっくり」

中に入ると、一人の中年男性がカウンターに座っていた。

真面目に店番をしている様子はなく、右手にカップを持ちながら新聞を眺めている。

「よっ、ダイダロのオッサン。達者だったか？」

リックは壁に掛けられた剣や、鞘に入れられたナイフを眺めながら、カウンターに歩み寄り、それに肘を付けながらそう言う。

その声にダイダロと呼ばれている店主が新聞から顔を覗かせる。

「何がオッサンだ！……ってリックウ！？」

「当たり前だ。にしても寂れてる店だなあいからわず。看板くらいつけとけっての」

右手に持ったカップを落としそうな勢いで、中年は立ちあがり、大笑いしながらリックの肩をバンバンと叩く。

「ディルが逝っちまってから……五年か。随分とでかくなったもんだな」

ディルとは、リックの父親であり、五年前に病気で命を落としている。今リックが持っている剣と腕輪はディルの形見であり、剣術も親譲りである。

「六年前だろ、親父が死んだのは。ったく、忘れやがって」

「そつえばそうだったな。で、今日の用件は？ お前の事だ、ただ会いに来たってわけでもなかるうに」

久しぶりを見るリックを懐かしみながらも、ダイダロは用件を聞く。その顔は先ほどの怠け顔ではなく、職人の顔であった。

「ああ、この剣を研ぎ直してくれ」

リックは腰から剣を取り、カウンターに荒い仕草でドサリと置く。それをダイダロは受け取り、慣れた手つきで鞘さやから剣を抜く。

「また随分と荒く使ったもんだな」

剣を目の前ですらしながら、ダイダロは品定めをする。刃の部分は所々刃こぼれしていて、とても良い状態とは言えなかった。

「自分でも手入れしてはいるんだが、どうも限界が」

「それはしょうがないさ。この剣は使い手を選ぶからな。使う者も、手入れする者も、な」

ダイダロはいつもの決まり文句でそう言つと、鞘に剣を戻す。

「じゃあ三日貰うぞ。金はいつも通りだ」

「げ……少しは負けるよオッサン」

「そこでオッサンと言わなきゃ、考えたんだがな。素直に払え」

ニヤリの苦笑するダイダロにリックは悪態をつき、店を出ようと背中を向けた時、目の前の扉が開いた。

滅多に客の来ない店の扉が開いたのだ。リックは驚きつつも、その入店者を見る。

それは女だった。

髪は金色で、短髪。目は薄く緑が掛っている。服は、目と同じ緑に、黄色の綺麗な装飾が施された、シャツとズボン。露出が多い（むしろほぼ無い）服で無いにも関わらず、上半身にある盛り上がった丸みが物凄く目立っていた。用するに、大きいという事だ。

「……え？」

リックはその女に何か違和感を感じた。それは胸が大きくて興奮するとか、美人だからではなく、もっと本心的な感じだった。理由は分からないが、胸騒ぎがし、腕輪を付けている右手が、どうもわずくのである。

彼女からすれば、初対面の男にじろじろと見られているわけだが、少し不気味そうに、眉間に軽くしわを寄せて彼女は口を開く。

「えーと、合った事、ありま……す？」

「い、いや。こんな店に客なんて来るんだな、とな」

リックはもつともな言い分で誤魔化す。言い分と言っても、実際にそう思っているのだから。

この店は、閑古鳥が鳴いている状態。いや、閑古鳥が住み着いて卵まで産んでいる状態だ。客という存在が来る事でさえ珍しく、この物騒なご時世にも関わらず、店を一日中無人で開け放っているのも強盗一人入りやしない所。

そこに客、しかも女が来るとなればそれこそ大事件である。

「ダイダロさんの腕は確か。来て何か悪い？」

「いや。にしてもよくもまあ……」

妙に自信ありげに彼女はそう言う。さらにこの言い草は、こここの常連だという事をリックに推測させた。

それに答えながら、リックはダイダロの方を鼻で笑いながら見る。ダイダロは彼女の言うとおり腕は確かである。

だが少々癖のある物を作るため、ダイダロの武器は普通の人からはあまり好まれない。好んだ事のある人物は全て頭に残っていると、本人は言っている。それほどしか客が居ないのである。

という事は、彼女は彼の癖を敬愛する希少存在という事だ。良く

言えば貴重なお客様。悪く言えば、変わってる。

「ところでダイダロさん、私の剣、出来上がってます？」

「ああ出来とるよ。ホラ、こんなんでどうだ？」

彼女は剣を受け取ると、所々に宝石で細工されている鞘から抜く。剣は細いロングソードで、柄の辺りにもまた宝石——ではなく、霊石の細工。そして金属の刃が光で反射して光っている。

「オッサンって、こんな貴族の剣みたいのも出来るんだな……」

「違う違う。俺がやったのは刃の所だけだ。他の装飾は既にしてあったよ」

「そう、この剣は私が持ち込んだもので、それを少し加工してもらっただけだ」

と言うと、彼女は剣を左右に軽く薙ぎ払う。剣は、空気を斬る音を響かせて軽々しく舞う。

彼女は1度その舞いを止めると、剣を自分の前に縦に持ち、口を開いた。

「冷たき氷よ、汝に力を……！」

彼女がそう唱えると、剣の柄にはめ込んである一つの霊石が光ると同時に刃が青み始め、刃から冷気が感じられた。

彼女の容姿もあり、その姿はとある神話に現れる白夜の天使のようで、神秘的かつ美しかった。

「ま、魔法剣!？」

「中々の腕のつもりなんだけど？」

「腕と言うか……、使える奴を親父以外で初めて見た……」

魔法剣と言うのは、その名の通り剣に魔法を宿らせる技である。言葉では簡単だが、実際に使いこなすには相当の魔法の力と剣術がなくてはなく、実際に出来る者はこの世界にもほとんど居ないと言われている。希少存在なのだ。

「ダイダロさん、いい感じです。お代はこれで」

「我ながら上手くいったわい」

ダイダロは満足そうに報酬の入った革袋を受け取る。その膨らみが、リックが似たような注文をした時より明らかに少なめだったのは言うまでも無い。

実際、魔法を宿らせるように刃を加工するのは相当な技術が必要とされている。ダイダロも過去にその才能が認められ、国に雇用された事もあったが、自身の癖のために追い出された。そんな昔話を、リックは父親から聞かされた事があった。

どうもその時に、デイルはダイダロと出会ったらしい。経緯は分からないのだが。

「じゃあ俺は行くな。オッサンの店、これからも通ってやってくれ。もう長くはないかもしれんがな」

リックは彼女の隣でそんな冗談を言い、扉を押して店を出る。後ろから聞こえる「俺はまだまだ死なんわ!」と言うダイダロの声を無視して。

「まったく、失礼な奴だ。なあ、ラティさん」

「……」

「えーと、ラティ・フルースさん?」

彼女——ラティはリックの去っていった扉をずっと見つめていた。忘れていた何かを見つけたような、透き通った瞳で。

このような感覚を、ラティは初めて感じていた。

「あ、ああ、すみません。では、私もこれで」

「あ、ちょ……」

ラティは逃げるようにドアを開けると、ダイダロー人を残して、店を後にした。

「何、あの人に対するこの感じ……。なにか不思議」

店から出たラティは、早足で歩きながらそう誰もいない通りで呟いていた。

「そういえば、名前も聞いてなかった。一体、あの男は何なんだ」

そんな物思いに浸りながら歩いていると、いつのまにか表通りが見える辺りまで来ていた。だが、様子がどうもおかしい。いつもの活気がある慌ただしさではなく、それはまるで混乱しているように見えた。

ラティはどうも状況が掴めず、近くにいた中年の男性を捕まえ、事情を聴く。

「魔物だよ！ 森の方から魔物が降りて来たんだ」

「魔物！？ どっちですか？」

「あっちだよ、川の近くの。でも今は危険だから……っておい！」

男性が説明を終える前には、ラティは彼が指差した方向に走り出していた。

序章【？】 暴れ猪

森の中から続く道にある街の門。その門から続く表通りを通れば大きな広場がある。

普段は集会をやるだとか、市が開かれるでうるさいくらいに賑わっている所だが、今は別の理由で騒がしくなっていた。

「この魔物って大人しいのに……。何で？」

「私が知るわけないでしょ！」

魔物の名前はスクオンク。大きさは人間と比べると、身長は同じくらいで、大きさ自体は四、五倍ほど。かなり大きい。見た目は猪と近く、特徴としては自身の体長ほどの細長い尻尾と大きな牙。

だが、見た目とは裏腹に大人しく、人が近づいても何の被害も蒙むらない。むしろ好かれていると言っているくらいである。

だが、二人の目の前には、目が真っ赤に充血し、鼻息を轟々と鳴らす怒り狂うスクオンクの姿だった。

「ちょっとアイラ、何をする気!？」

「でも、このまま放っておくわけにはいかないでしょ」

そうアイラは言うと、刀の鐔てつに親指を立てて、鯉口を切る。これは魔物に対して敵意を見せているという、シャイナに対しての覚悟、意思表示でもあった。

シャイナもそれを見てやっと状況を悟ったのか、しぶしぶロッドを構え、臨戦態勢を取った。

「……分かった、止める。でも、なるべく命は奪わないで」

「こっちがやられるかもしれないって時によくも……。ま、そーい

うのも嫌いじゃないけどねえ」

慰めか、それとも本心からか、アイラはそう言って刀を鞘から抜く。まだこちらに気付いてはいないらしく、屋台に並ぶ魚やら果物らの肉を派手に撒き散らしながら暴れていた。

「まずは場所を変えないと。私が魔法で誘導する」

シャイナはロッドを構え、詠唱をしスクオンクに向けて火の魔法を放つ。直接狙っているわけでもなく、軽い陽動だ。それに気付き、スクオンクは二人のほうに体を向け、走りだす体制を作り勢いよく突進してきた。

「気付いたみたいね。ほーら、こつちこつち！」

アイラが挑発するように大声で叫ぶ。言葉を理解しているかは定かではないが、声を発する方に、スクオンクは向かってくる。

気付けば、街外れの川沿いまで来ていた。

「殺さないってもねえ。ま、善処しますか。援護は頼むよ！」

「任せて！　じゃあいくよ……フリーズ！」

アイラは刀を強く持ち直し、スクオンクと向き合う。スクオンクも敵意を感じ取ったのか、後ろ脚で地面を蹴り、スピードをつけて突進してくる。

猪突猛進なその動きを止めるべく、シャイナは氷を足元に向かって放つ。少しは動きを止められはしたが、減速した程度ですぐに払われる。その隙についてアイラはスクオンクの背後に回り、刀を横に振りかぶる。だが、接近に気付いたスクオンクはそれを尻尾でなぎ払おうと、右から左へと体重移動をする。

「おっと！ んな簡単には当たらないよ」

アイラその攻撃を、バックステップでかわす。紙一重のそれだが、予想範囲内の攻撃。

避けられたせいで力の行き場を失った尻尾は、その先にある貧相な木造の小屋に当る。小屋はガラガラと砂ぼこりを上げながら崩れ去り、その威力を露にする。アイラはそれに当たたらと想像すると身震いし、背中に冷たい汗をかく。

「ふう、危ない危ない。どうも簡単には、いかしていただけないみたいねえ」

アイラは息を素早く整えると、こちらに身体を向けて突進の目標を定めているスクオンクの側面に素早く周りこみ、茶色い皮膚を刀で横に切り裂く。深くは無いが、十分に効果的なダメージだったようで、その痛みでスクオンクは悲痛の声を上げる。だが斬られた事で発狂したのか、先程に比べて動きがさらに素早く、力強く、そして俊敏になる。

「つつ…！」

突進、尻尾。次々に繰り出される攻撃の隙を見てはスクオンクに斬りにかかるアイラだが、どれもかする程度しか命中させられず、思うように斬撃を与えられない。

シャイナは魔法を上手く使い動きを鈍らせる事に貢献はするも、やはり決定打は与えられない。

身体の小さい二人は、次第に体力が削られていつていた。

「ハア、ハア……。これじゃキリが無いわね」

疲れきって肩で息しているアイラに向かって、スクォンクがここぞばかりに全速力で突っ込む。アイラにそれを大きく回避する体力は残っておらず、覚悟を決めて刀を構えたまま正面で向き合う。すれ違いの時に一太刀浴びせると同時に、左右どちらかに滑りこむようにして避けようという魂胆だった。

「無茶だよ！ 避けて！」

と言いながら、シャイナは体力を振り絞って隙を作るべく氷を飛ばす。幸い、スクォンクの動きは鈍るがアイラは微動すらしない。逆にチャンスが来たと不敵な笑みを浮かべる。

瞬間、魔物と人間が交差する。その瞬間アイラは右にステップを踏み、側面を下から思いつき斬り上げる。それも先程斬った場所に、縦に交差させるように。

攻撃は赤黒い血が吹き出し、スクォンクは激痛の雄叫びを上げる。が、その痛みを怒りに変えたのか、身体を大きく動かし、長い尻尾を思いつき振りきる。

「アイラ！」

シャイナが気付いた時にはアイラは真横から迫るそれに当り、間もなく大きく吹き飛ばされ、倒れていた。何とか致命傷は避けられしく、なんとか立ち上がりはしたが、左手で右手を抱えて、苦痛の表情を浮かべていた。

「ハハっ、だらしのないねえ、この様……」

弱々しく笑うアイラに逃げる時も与えず、スクォンクは鼻息を荒

くし、牙を前に突進する。このままだと確実に牙に貫かれるだろう。アイラは逃げることも叶わず、反射的にその場で目を瞑る。シャインの叫び声が聞こえるが、聞こえた所でどうしようもない。スクオンクが迫る気配を感じながら覚悟を決める……が、身体はいつになっても貫かれず、右腕の痛みだけが感じられたのだった。

「悪いな、少し気絶してもらおう！」

身体が貫かれる衝撃の代わりに感じたのは、耳から女性の叫び声とスクオンクのうめき声。

何事かと思い目を開けると、重量感のあるスクオンクが今まさに地面に突っ伏す所だった。その横に立っていたのは、美しく光るロングソードを持った金髪の女性。髪は少し空中に浮遊しており、人知を超えた天使のようで幻想的だった。

「アンタがコイツを倒した……の？」

「まあな。といっても、殺してはない。少し感電させたただけだ」
「感電？」

そう言っ、剣を軽々しく左右に薙ぎ払う。すると、先程まで神々しく光っていた剣が輝きを失い、金属の冷たい銀色に戻る。

「それはともかく、大丈夫か？ 見た所結構キツそうだが？」
「まあなんとかね……。それよりもありがと。助けてくれて」

と言いながら、アイラは立ち上がる。が、すぐにバランスを崩してしまい、倒れそうになる所を女性に支えられる。

「無理してるな。ほら、肩を貸す」

「ん……あんがと……」

そんなやり取りをしていると、シャイナが杖を放り投げて、叫びながら走ってきた。顔を見ると、ほんのり桃のように赤くなっていた。

「アイラ！ 馬鹿じゃないの、あんな事して……」

「ごめん。心配かけたね」

「当たり前でしょ！ 全く、この人がいなきゃ今頃……」

そう涙声で言う。それを見てアイラは笑う。怪我をしているのなんて構わずに、とても楽しそうに。それが彼女だった。

「まったく、悪かったわよ。ホントに……ってそういえば、名前なんていうの？」

名前を呼ぼうとして詰まったのか、アイラは唐突に問いかけた。彼女も名前を名乗っていない事に気付いたのか、咳ばらいを自己紹介をする。

「私はラティ。魔法剣の使い手だ」

そう、綺麗なはっきりとした声で言っていた。

序章【？】 陽気な船乗り

「今回の件はありがと。また会えるといいわね」

「そうだな。ブリドアに来た時には、会えるかもしれないな」

「ブリドアねえ……」

心地よい日差しが青い海に降り注いでいる。見ればいつくかの船が帆を広げて浮かんでいる。

そう、ここはシフランの港。

昨日の騒ぎで、見事、魔物を黙らした魔法剣士、ラティ・フルー
ス。彼女が自分の国——ブリドアに帰る、と言う事で、見送りに
来たわけだ。

「じゃあ、私は行くぞ。また会うのを、楽しみにしてる」

「最後に一つ、いいか？」

リックは少し気恥ずかしそうに言って、咳ばらいをする。自分か
ら話しかけたくせに、何をやってるんだ？ という顔をされてしま
う。まあ当然の事と言えば当然の事。

「何だ？」

「えーとフルース……、だよな。フルース、ダイダロのじじいの所、
これからも行ってやってくれ。知ってると思うが、貧乏屋だから
な、あそこ」

そう、前日リックがダイダロの店は、閑古鳥が住み着いて卵まで
産んでいる状態。じじいと馬鹿にはいるが、ダイダロはリック
の大切な友人である。一人でも多く客が来るようにと、心の中では
思っているのだ。その現れとして、顧客の確保。重要と言えば重要

だった。

「無論、ダイダロさんの所には行くさ。私の剣はあの人にしか任せられない」

自身気にそう言つて、腰に付けている、装飾豊かな剣を鞘の上からポンポンと叩く。

「そうか、ならいいんだ」

話が終わったのを確認すると、ラティは船に掛っている木造の橋を、きしむ音を立てながら渡る。

ふと途中で立ち止まり、リックのほうに振り返る。まだラティはよく分らない、不思議な感覚が体を走っていた。リックも同じだった。心の奥に何か引つかかるような物を感じていた。それが何なのかは、全く分らないが。

「レーランス……、だったか？」

少し口調が変わったと、リックは感じた。どうも少し、緊張しているような雰囲気を感じ取れた。

「そうだ。何か付いてるか？」

「いや……、何でもない。またな」

ラティは、自分から話しかけたのにも関わらず、一方的に会話を切り、早足で船内に消えて行った。リックが声をかけるも、軽く動作で返事をしただけだった。

そんな冷たい別れだったのだが、リックは心の奥底で、必ずまた会える。何故かそう、お互い強く感じていた。

「にしても、帝国軍人のエリートさんだったとはねえ」

アイラは彼女が乗った船が出港したのを確認して、一言。別に陰口だとか悪口というわけではない。実際驚いているのだ。

「まあ、あながちそんな雰囲気あったけどな。口も偉そうだったし」「強かったしね。ラティが来なかったらアイラ、下手すれば死んだよ」

「しょ、しょうがないでしょが。殺さないように止めるって言われてもねえ……」

彼らが話を聞いたところ、ラティはブリドア帝国の軍、それも『王宮付き』に所属する人間であるらしい。

ブリドア帝国は世界で一番の軍事国家。強靱な軍隊を持つことで有名である。その軍人、しかも王宮付きと言えば、かなりの強さと知識を兼ね合わせた実力が無ければいけない。

「よし、俺たちもそろそろ行くか。シフランまで、まだ長いしな」

シーフスからシフランへは、海岸線に沿っていくルート。長旅、と呼べるほどの距離は無いが、かなりの距離がある。

「船に乗って行けたら、楽なのに……」

「生憎貧乏旅だからな。諦めろ」

羨ましそうに海に浮かぶ船を見つめるシャイナ。しかし、視界を遮られ、見えなくなる。

遮ったのは1人の男。赤色の布に白に模様の入ったバンダナをしていて、そこからはみ出して緑色の髪が伺える。歳はリックよりも

六、七歳上と言った所か。

「お困りのようだね。お嬢さん達」

片手をポケットに突っ込んで、事情を全て知ってる口調で話す。
何か格好付けてるのか、口調が所謂、キザな物。それに女性二人は
不快感、もしくは殺意を覚える。

「よければ一緒に海の旅をし……」
「うるさい。消えて、女ったらし」

咄嗟に口に出たシャイナの言葉に、あえなく撃沈させられてしま
う。

「んじゃ、行こうぜ。買いだしとかもしなきゃいけないしな」
「そうだね。テントって今いくつあるんだっけ？」

残りの二人も、空気を察し、何構わず無視をする。

「待て待て待て！ 何がナンパだ。単に船に乗せてやるって話しじ
ゃねえか」

背中を向けて歩こうとする二人を、必死で呼びとめる男。ほおっ
ておいてもやかましいと判断したのか、アイラが仕方が無く相手な
る。

「どうみても、ヘツタクソな口説きだとは思わないでしょうが！」
アイラの言っている通り、どう考えても好意ではなく、下心で誘
ってるんじゃない。が、男が理由を話し始めた。どうも町長か

ら頼まれたらしく、シフランまで送ってくれる、とのことである。

「あーそういえば……『何かお礼ができればいいのですが……』とか言ってたっけ」

アイラが思いだすように、町長の言葉を真似る。妙にそれが似ていたため、シャイナの口から少し笑いがこぼれた。ついでに男からもそれはみられた。

「中々似てるじゃねえか。まあ、じいさんなりの昨日の騒ぎを止めてくれたお礼なんだろ」

「ほお。命賭けた甲斐があったもんね。どする？」

「俺は別にいいけどな。シャイナは？」

「私もいいよ。歩くよりよっぽどだし」

決まり、だな。と、男はいい、意気揚々に自己紹介を始める。口調が口説くようで、一々面倒くさいのだが、三人は黙って聞く事にする。

「じゃあよろしく、お嬢さん方。俺はヴェルドナ・クァイス。生憎、長い極まりない上に、発音しにくい名前だからな。ヴェンでいいぜ」

と言い右目でウィンクする。勿論、誰もカツコイイとは思っていない。そして、リックに対しては前置きが無かった事も忘れてはならない。

「私はシャイナ・ツールギスト、惚れないでね。まあ、惚れたら凍らすけど」

「アイラよ。因みに、変な事したら、切り刻むからね」

「俺はリックだ。よろしくな、オッサン」

三人の、手荒い自己紹介であった。とても親切に船に乗せてくれる人と言う態度ではない。ただヴェンも、決して気を悪くはしていなかった。何だかんだでお互い、気が合うのだ。

「では、俺の船に案内しようか。着いてきな」

一々語尾と同時に、妙なポーズを取るのはさておき、リックたちはヴェンの後に続く。

停泊している多くの船と、働く人を片目に、湾沿いを進むと、周りと比べると、少し外装が古臭い船が現れた。古いといってもボロ臭いわけではなく、逆にそれが立派に見える。そんな威厳のある船だ。

「これが俺の船、ミストラルだ」

誇らしく、自慢するようにヴェンがそう、高らかに言う。実際、それほどの物だと、三人は思った。

「おお、オッサンの船っていうから、もっとアレかと思ったが……」

「凄い、綺麗な船……」

「本人とは大違いね」

「何なんだよ！？ 俺にもったいないみたいな言い草は！」

そう、怒鳴るヴェン。怒鳴ると言っても、本気で怒っているのではなく、あくまでふざけてである。本人はともかく、周りからはそう見えた。

「まあ、俺と最高に愛称がいったのは後でじっくり語るとして……、おーい、お前らあ！ もう出れるかー？」

ヴェンはミストラルに向かって叫ぶ。すると、一人の男が甲板から威勢良く声を張り上げた。どうやら船員のようで、動きやすそうなシャツを着ており、いかにも海の男と言った感じである。

「後は“積荷”を詰め込んだら出港できますよー」
「積荷？　なんか運んでんのか？」

リックが聞くと、ヴェンは言葉で返事を返す代わりに、人差し指でリック達三人を指す。

「お・ま・え・ら、だよ。では、乗船願おうか。積荷が乗り次第、出港だ！」

その声と同時に、ミストラル——“春一番の風”に乗って飛んでいる巨鳥が描かれた帆が、勢いよく下げられた。

序章【？】 初勝負

「うえっ……。くそっ、あの野郎……」

潮風香る、夜の甲板。リックは酔う体をふらつかせながらおぼつかない足取りで歩いていった。酒の飲み過ぎで見事によってしまったのだ。

さらには船が大きく揺れているのも相まって、酔いの気持ち悪さは最高潮に達していた。

どうしてこうになるまで飲んだのか。それは数時間前……、

『よし！ 今日飲むぞ、お前ら！』

ヴェンがそう、高らかに宣言したのが始まりだった。

『お、いいな。良い酒もあるじゃねえか』

『気が利いてるじゃないの。私も飲むよ』

『私も少し貰おうかな。強いのは無理だけど』

最初は全員軽い気持ちで酒を飲んでいたのだが、場が盛り上がるにつれて、ヴェンがある一本のビンを持ち出してきた。中身はウィスキー、それも、かなり強めの物。

酒が回って判断力が低下していたのが運の尽きだったのか、三人はそれを軽視して口にしてしまったのだった。

『あ、私、もうギブ……。シャイナもやめときって……』

『……すー』

『ったく……。連れてくかあ……』

いち早くシャイナが倒れている事に気付いたアイラは、飲み会の席を早々と立った。ついでに机に突っ伏しているシャイナを背中に抱え、引きずるようにして部屋に連れて行った。最後に残ったリックも遅からず危険を察知し、席を立とうとするが、

『へっ。男あろう者がもう降参か？ だらしねえな』

『何を……？ よし！ 上等じゃねえか！』

と、ヴェンの挑発に乗ってしまったのだった。

その後気付いた時には、既に誰も居なく、真っ暗になっている部屋のテーブルに、一人突っ伏していた。

「う、うえっ……。こんな飲んだの始めてだぜ、ったく……」

そして寝ようにも、酔いすぎて全く寝付けないので、少しでも酔いを醒ますべく、こうして外の風に当たっているわけである。

風は既に真夜中だというのに、生温かい。季節が夏に移り変わるうとしているのだと、肌で感じられる。

少し鼻に気を使えば、潮の香りが感じられる。海から風に乗って、陸に流れてくる匂いではなく、直接海から感じられる匂いだ。

「ん……？」

酔いを覚ましながら甲板を歩いていると、海を背に手摺に寄り掛かる人を見つけた。

月で輝いている、夜の海と同じ群青色の長い髪が、風で綺麗になりびいている。リックは最初、誰なのか分からなかったが、少し目を凝らして見ればすぐに分かった。

「アイラ……？」

トレードマークの白い鉢巻で普段は結んでいる髪を解いていたため、誰なのかすぐに判別できなかったのだ。

「あ……」

アイラはハツとしてリックのほうを見るが、それと同時に何かを手から落としたようだ。その物はリックの足元にまでゆっくり転がって行き、目の前で静止する。それをリックは拾い簡単に観察するが、小さな穴が空いている以外、特に変哲も無い、ただの青いガラス玉だった。

「何だリックか。ヴェンと飲み比べしてたんじゃないの？」

「あのオッサンにはついてけねえよ……。気付いたら一人でぶっ倒れてた」

「そっか。あ、それ返して」

アイラは軽い会話をした後、リックの前に右腕の手のひらを突き出す。そこには既に赤いガラス玉がある。リックが拾ったのと同じく、穴以外、特に特徴の無い、普通の物。

リックは持っていた青のガラス玉を、アイラの手の上に持つける。アイラは軽く礼を言っただけを受け取ると、もう片方の手に持っていた紐に通して、ネックレスにする。大事そうに、首から掛けて、胸の中に仕舞い込む。そして、先程居た場所に、再び、寄りかかる。

「あんがとね」

「あ、ああ」

お礼のやり取りをした後、しばらく沈黙が続く。別に気まずいというわけではなく、互いに何も会話していないだけである。

——そういえば……、初めて礼なんて言われたんじゃないか？

アイラと出会ってからの数日を振り返りながら、リックはふと思う。それは情けないながら、アイラに助けてもらう事が多かったという事。

それと、今の物は大事な何かなのかと。

「あ、えーと、それ、何か大事なモンなのか？」

リックが静けさに耐えられず、沈黙を破りアイラに問いかける。心中で考えている事を悟られないよう、さり気なく。

そんな意図をアイラは知るわけもなく、いつもの明るい調子でそれに答える。

「これ？ これはただの預かり物。さつさと返したいんだけどね」
「だったら合って、返せばいいじゃんか」

リックがそう言うと、アイラの表情が一瞬、晴れから一気に大雨に変わった天気のような変化を見せる。が、すぐにいつもの明るい顔になり、返事が返ってくる。

「会えれば……いいんだけどね」

とてつもない違和感を、アイラの表情から感じたリックだが、自分がまだ酔っているのだと思い、その表情を頭から振り払う。が、どうも気になって仕方がなかった。

そんな事を茫然としながら考えていると、次はアイラから話しか

けていた。

「そうだ。アンタって強いんでしょ？」

アイラが突拍子もなく、そう言う。

「強いって、剣の事か？ まあ、常人よりは強いとは思うが」

「じゃあ、勝負しよ！」

と言い、アイラは屈んで、壊れて部分毎にバラバラになり甲板にほっばつてあるモップの柄を二つ拾い、大きい方をリックに投げ渡す。残った柄を刀を持つように構え、降り始める。

「ったく、こんな夜中に……。まあ、酔い覚ましに丁度いいか」

リックも、投げ渡された柄の重さを確認するように、縦に軽く素振りする。

「お、乗ってきたね。剣を落とすか、決定打を与えられたら負け。ま、私はそんな事しないし、させないけどね」

「要するに、お前に『貴方には敵いません』って言わせればいいんだろ？」

そう嫌味を笑いながら言い合い、二人は剣を構える。目は瞬き一つ無い、真剣そのものである。

「言っておくけど、手え抜いたら、ただじゃ済まないからね！」
「んな事しねえよ！」

リックはそう言って、剣を両手で持ち、振りかぶった。

「返り討ち！」

二つの柄が、木と木の当る、心地よい響きと共に交差した。この時始めて、二人が相まっただった。この時から始まった二人の勝負は、いずれ思いにもよらない決着を見せることとなる。

序章【？】 小さな旅の終わり

「向かい風か……」

大海原に吹く風で、バンダナからはみ出た緑色の髪が揺れる。腕を組み、海の様子をまじまじと観察する姿からは、長い旅で培った風格が感じられた。

「ねえヴェン。向かい風って、大丈夫？」

シャイナが心配そうに、船首にいるヴェンに寄ってきた。ヴェンはその声に振り向くと、狩りに成功し土産を持って帰って来た狩人のような得意げな顔になって、話し始めた。

「帆船は読んで字の如く、帆に風をあてて進む船。前に進むには後ろからの風がいるのは必然だ。向かい風になれば、どうなる？」

「そりゃ、向かい風だったら進めないでしょ」

シャイナは当然の返事をする。実際に、今、船はほとんど動いていない。が、ヴェンはそれを聞いてニヤリと笑みを浮かべ、人差し指を立てて、舌で音を立てながら左右に振る。

「帆船ってのは、向かい風に向かって進むんだ」

「向かい風に進む……？ そんな事出来るの？」

「まあな。よしお前ら！ “ヤード”を動かせ！」

甲板の中心で、使いこまれたロープを持って、並んでいる男達に、ヴェンが指示をする。人数は九人。その中にリックも混じっていたが、シャイナはあまり気にしない。

「オッサン！俺まで子分呼ばわりか。ふざけんな！」

「へっ、賭けに負けたお前が悪いんだろっが！今日一日せっせと働きな！」

とか言っつて不満を垂らしてはいるが、何だかんだでリックは他の男達と楽しそうに仕事をしている。

因みに賭けというのは、いつかの酒の飲みあいの事である。リックは見事に酔いつぶれている。

「で、ヤードって何？」

「ヤードってのは、マスト……っつても分からないよな。マストってのは柱の事な。前からフォア、メイン、ミズンマストって言うんだ。んで、海面と水平についている棒、あれがヤードだ。帆を張るのに使う。んで、今風向きに合わせてヤードを調節してるってわけだ。それでだが……」

ヴェンが船の仕組みを、熱く語り始める。ボウ、スターン、スル、リギン。別の言語のような言葉がシャイナの耳に飛び込んでくる。意味も一つ一つ、詳しく説明しているようだったが、シャイナにとっては、意味不明の単語の組み合わせにしか感じられていなかった。かろうじてシャイナが理解できたのは、向かい風でも船が進む理由。風に向かつて斜めに帆を当てることでジグザグに進む、ということだけだ。

「シャイナ！おっはよー」

「あ、アイラ。やっと起きた」

「もう一人のお嬢さんのお目覚めか」

もはや聞き流し状態にも関わらず、その場から抜け出せないシャ

イナに助け舟。アイラの遅い起床のおかげである。髪は寝起きのためか少々崩れていたが、トレードマークの白い鉢巻はかさず付けていた。

そして、少し離れた所からアイラを見るリックには、もう一つのトレードマークも見えていた。それは一昨日の夜知った——胸から下げた、二つのガラス玉から成るネックレス。直視出来ないであろうそれを、リックは服越しに見ていた。

だがそれも、船員一人の声によって見えなくなる。自分がアイラから目を逸らしたから。

「どうだ？ 俺の船の……」寝心地はどうだった？ と、続くはずだったのだが、それを待たずに強烈な返事が、アイラからヴェンに返ってくる。

「最悪」

女王が奴隷を見下すような視線で、アイラはそう言い放った。

「何でだよ！ 一番いい船室なんだぞ！」

「いや、とりあえずアンタの言った事には、否定したほうが面白いから。ねえ」

苦笑しながらアイラは言う。アイラもリックもヴェンより年下なのだが、態々会話をする時は馬鹿にするような言葉を選ぶ。ヴェンもあながち、本気で嫌がっているわけでもないのだが。

「あ、そういえば壁に引っかけた絵、落ちてそのままになってんだけど、いい？」

「ふざけんな！ あれは必死こいて手に入れた奴なんだぞ！ くっそおお！」

と言い、ヴェンは船内に向かって、全速力走り出す。が、すぐに甲板で足を滑らせ、荷物が重なっている所に、騒音と共に頭から突っ込む。その姿は滑稽で、見ている人を楽しませてくれる。

「なあワンド、オッサン蹴っていいか？」

「だったら仕事してくれ。やる事はまだ残ってるぞ」

「りょーかい。んで、今度は何を？」

目の前に突っ込んできたヴェンに対して、リックは全く心配しない。むしろ追い打ちをかけようと、していた。船員も、全く動じない。それだけ、普段からこうなんだと思わされるアイラとシャイナ。そう考えると、先ほどよりも増して、面白くなってしまふ。

「アッハッハ！ バツカじゃないの？ 頭から突っ込んだよコイツ」

「ホント馬鹿ね……。ったく、どうしょうもない人」

そんな賑やか航海も出発してから一週間ほどで終わり、目的地シフランの港に到着した。

？＋？＋？＋？＋？

シフランは大陸の東を領地にし、領地の多くが森で作られている国、デイスの首都である。治安の良さは世界の中でも最高峰。気候と地形にも恵まれ、とても活気のある城下町が広がる。町は塀で囲まれ、魔物からの攻撃もほとんど無く、安全。そして何より、魔法文化が盛んな都市としても、有名である。

霊石、魔道書を始め、様々な魔法分野の研究が進められている。著名な魔法使いの多くも、この国で探究を続けている。

「じゃあ、私は行くけど、一緒に来る？」

下船するなり、シャイナは楽しそうな声で、そう言う。

気分が高ぶっているその姿は愛らしく、“女の子らしい”とはよく言った物だ。

「ここまで付き合ったら、最後まで行くさ。因みにどんな人なんだ？」

あ、そう。聞きたい？ また随分と嬉しそうな声で聞いてくる。

アイラはその可愛らしい反応に思わず苦笑する。もちろん、シャイナに見えないように、リックの後ろでこっそりとだ。

「私のお師匠様！」

ここで一人の旅の目的が果たされ、それが終わろうとしていた。

序章【？】 魔法の師

「なあシャイナ。お前のお師匠様は美人か？」

「何よりそれが最初に聞く事なんだ……。美人かは自分で見てみれば？」

船から降りて、歩く三人、ではなく四人。ヴェンもそのお師匠様とやらが気になる、という事で一緒に着いてきたのだった。

しばらく歩くと、シフランの大通りから少し外れた、薬草屋へ行きついた。この少し古ぼけた場所が、シャイナの旅の終着駅そこだった。

「お師匠様、いますかー？」

小綺麗な木製のドアを呼び鈴の音と共に開けるなり、シャイナは店の中全体に十分行きわたる声で呼ぶ。だが、返事は愚か、人の気配すら全く感じない。薬草の何とも言えない匂いだけが、そこに充満していた。

「気配が、全く無いんですけどねえ」

「何だ。お師匠様って人じゃないのか？」

「まあ、人以外になる時はあるかも……」

「おいおい、やめてくれよ」

冗談には聞き取れないシャイナの言葉に、ヴェンは手を上げて飽きれる。本当に何かに変わっていて、突然目の前に現れる。なんて状況は避けたい所。

四人が店内を凝視していると、閉めていた扉が呼び鈴を鳴らして

開く。

「お師匠様？」

全員がその音に振り向く。だが、そこには開け放たれた扉のみ。人の気配など微塵にも無い。

「誰かいるのか？」

「いないねえ……」

「お師匠さま？」

「誰も居ないだろ……」

四人が確認するように呟いても、誰も出てこない。だが突然、背後から聞きなれない高い声が、四人の耳に突然入り混んできた。

「いや、いるでしょ」

『ええ！？』

四人はその声に驚きを隠せないまま振り向き、声をそろえて悲鳴を上げた。

そこにいたのは、長身で膝の辺りまで伸びている赤い髪が目立つ女性。服はロングのスカートに、髪に負けないほどの長さのマント。右手には細い棒の先に、赤透明な霊石を付けただけのシンプルなお口ツド。柄の部分はかなり色が褪せており、使いこんでいる事がよく分かる。女性はリックから見て明らかに年上。と言ってもそこまで歳というわけでもない。師匠というので全員年配を想像していたのだが、まだ若さが目だっていた。

「何だ何だ、気づける奴は一人も居ないのか？ だらしないね」

「お師匠様！ 何やってるんですか？」

「んー？ 面白そうだったんで、ついね」

と言い、ニヤニヤする。そんなに面白いのかというほどに。

「そういえば、まだ自己紹介してなかったね。私はリユーナ・メニウ。見ての通り、薬草屋やってるから。ついでに、魔法研究もしてるわよ。そしてさらに余計かもしれないけど、私、強いわよ」

ふっふっふ、と、自信あり気に笑いながら、そう言う。なんだか言葉を発することに楽しそうな人である。

だが、その発言、強いという発言に、アイラが突っかかる。

「強いねえ……。どう強いんですか？ 魔法で？ それとも……」

「剣。とでも言いたげね」

リユーナは、アイラが言うはずだった言葉を先に使う。アイラは一瞬驚きはするが、すぐに首を縦に降る。

「魔法に関してはかなり自信はあるけど、剣は微妙かな？ まあ、貴方達には勝てる……と思うけど」

何なら試す？ と目線でリユーナは訴える。その顔は、随分と楽しそうだった。そして、挑戦的でもあった。

「真剣でいい？」

「別に致命傷までいかなきゃいいわよ。ふふっ。剣で勝負なんて何年ぶりかしら」

そう言って、リユーナは扉を潜り表に出る。アイラもそれに続き、

他の三人も揃って出る。勝負をする二人は、人通りの無い通りのど真ん中で対峙する。剣を振るうには丁度いい場所だった。

アイラは親指を刀の鰐に当てて、鯉口を切る。だが、リユーナは剣ではなく、ロッドをクルクルと回転させている。

そう、剣を持っていないのだ。

「え、えーと、剣は……？」

試合する気があるのかこの人は？ と、喉までその言葉が出てくるが、アイラは我慢して口の中に留める。その不思議そうにしている様子に気づいたのか、リユーナは笑いながらこう言う。

「ふふつ。私の剣はこれよ。ホラ、こうすれば……」

リユーナはロッドを手品師のような素早く手慣れた動きでマントで覆う。口元が素早く動いたと思うと、次にはマントを翻す。すると先ほどまでロッドがあつたはずのその場所には、黄色く輝く光剣があつた。

ルーンスペル——術者の杖、ロッド等に光の刃を生成する魔法である。この魔法はあくまで一時的に剣を造り出すような物だが、剣術を鍛えた魔法使いからすれば遠距離の魔法と近距離の切り合い両方を可能とする非常に便利な魔法。この魔法を生み出した人間も、元は剣を振るっていた者だという。

ただ、その代償と言うべきか難易度の高い魔法であり、かなり高い能力を身に付けていなければ光の刃はたちまちに砕けてしますし、草も斬れないなまくらにもなるという訳だ。

「ルーンスペルよ。どう、中々でしょう？」

その光剣を、見せびらかすようにリユーナは左右に薙ぎ払う。振るう度に光の粒のような物が、空气中に飛び散っては、命が終わるかのようにゆっくりと消える。

「成程……。じゃあ、行きますよ！」

「来なさいな」

アイラは降る刀に勢いをつけて、リユーナに横から斬りかかる。勢い、狙いは問題無い。かなり理想的な軌道。完璧な攻撃。だが、それをリユーナは光剣を素早く移動させ受け止める。それも、添えるようにして軽々しく。

「くそっ！」

アイラは止められた刀を振り払い、もう一度体制を取り直し斬りかかる。だが、これも動きを読まれたように完全に止められる。

「どう動くか気配で感じるんだよ、お嬢さん」

アイラはさらに一度、二度と斬りかかるが、リユーナはそれを全て、美しく踊るように受け流す。それも、軽々しく、どこか楽しみを感じ取れる表情で。

「すごい……。シャイナ、お前のお師匠様は何者なんだ？」

二人とも頑張ってる！ と、しきりに騒いでいるシャイナにヴェンは問いかける。いつものふざけ口調ではなく、いたって真面目である。逆にそれが笑えると言えはそうなのだが、目の前で繰り広げられている戦いの魅力が勝り過ぎて誰も相手にしていない。

「私も、昔の事はよく知らないんだ。ただ、三十年前の“頂点戦争”で戦ってたと聞くけど……」
「成程、あの戦いの生き残りってわけか……ってえ？ そーゆー事は……」

ヴェンはそれで少しだけ納得するような表情を見せた後、曇った表情になる。また別の問題点を見つけたようだ。恐らくそれは、歳の問題だろう。

「くっ……強い！」

「私をなめちゃいけないよ。それでも何度か死線を潜ってきてるんだ」

「あっ……！」

短い悲鳴を上げた直後、アイラの刀は宙を舞って石の路上に落ちた。それを拾う間もなく、頬に冷たく、赤い液体が、頬を伝って流れていた。

気づけばリユーナの光剣が、顔の真横にあった。頬が少しそれに触れ、赤い血が滴る。

「私の勝ちのようね」

そう言うと、リユーナはルーンスペルを解き普通の状態に戻ったロットを、アイラ頬に当てる。

「ごめん。怪我させちゃったわね」

「いや、勝負ですから。にしても、歯が全く叩かなかった……です」

「無理して敬語の必要ないわよ。ちょっと待って、治しちゃうから……アキレア」

そう早々と呪文を唱えると、ロッドの先端の霊石が少し輝く。すると、アイラの頬の傷は先ほどまでのが嘘のように、綺麗に塞がってしまう。

「これでよしと。じゃあ、中でお茶でもしましょうか。これでも薬草屋だから葉っぱ色々あるのよ」

これもまた楽しそうに、リユーナは店の中に戻る。それにシャイナとヴェンも続いて入る。

「負けちまったな」

「悔しいわね。でも、私もまだまだって事ね……って、何笑ってるのよ!」

リックは口元を押さえて笑っていた。

「ハハハ、悪い悪い。お前がそんな事言つとさ……ハハッ」

「なっ、ふざけないでよ!」

次の瞬間、リックの悲鳴が短く聞こえた。むこうずねに蹴りが炸裂したのだ。

「まったくアイラ、何やってんの？ お師匠様がお茶入れてくれてるよ」

「あーごめんシャイナ。今いくね」

何故かアイラだけが呼ばれ、シャイナと共に店の中に入っていく。

「くそ、こういうときは俺無視なのな……」

リックは一人寂しく、蹴られた足を引きずって店内に入って行った。

？＋？＋？＋？

「あーあ、二人とも帰ってこないね」

「まったく、魔法が出来ないくらいで出てくなつての」

「ねえヴェン、原因はあんだだと思つよ……」

お茶の後に、リユーナから魔法を教わる事になったはいいが、アイラとリックは外に出かけてしまった。

原因は、教わるも全く出来ないリックとアイラに対して、ヴェンが物凄いスピードで様々な魔法が出来てしまった事にある。

「まあ、これに至ってはしょうがないわよ。魔法は相性があるから……。まあ、魔法が根っから苦手だったら、しょうがないんだけどね。貴方は魔法の素質があるようだし」

魔法というのは、火、風、聖など、いくつかの属性に分けられている。そして人間も同じく、この属性内の中で分類される。そして自分の属性の魔法は、扱いやすいのである。

これは必ず、一人一属性と決まっており、生まれつき持っている物である。ただ属性が火だからと言っても、他の属性を極める事は不可能な物ではない。修行の努力とセンスさえあれば、自分の持つ属性以外を極める事は可能なのだ。

「さてと……。そろそろ二人にも帰って来ていただきたいわね。夕飯にしたいわ」

「まったく、どこほつつき歩いてるんだか……」

「まあ、探しにいきましょうか。そう遠くには行ってないでしょ」

リユーナ達は、残りの二人を探すべく、店を後にする。
そして、出会う事となるのだ。不思議な詩人の、謎めいた出来事と共に。

？＋？＋？＋？＋？

「あーあ。どーせ私達には魔法は剣がお似合いだよーだ！」

「これ以上言っな……。惨めになるだろうが」

多くの店が立ち並ぶ、シフランの通りを、リックとアイラは暇つぶしに歩いていた。アイラはしかめっ面である。

シャイナの師匠に会いに行っただけなのに、ついでに魔法を教わろうという話になり、簡単な物を習うのだが、『残念ながら、貴方達に魔法は向かないわね』と言われてしまった。

そして何よりも、あのヴェンが魔法を使えた事に苛立っているのだ。

「あのクソ野郎が……。何であんな奴が出来て、私に出来ないのよ！」

街中のだ真ん中で、地団駄を踏む。相当気に触るようだ。リックはさすがに周りの目が気になったのか、アイラを連れて、大通りから外れたルートを通る。

しばらく、アイラの愚痴を聞きながら歩くと、町の外れに出た。城下町の塀の内側だが、手付かずの自然が残る場所だ。

「やっぱ人混みの中より、こっちのほうが落ち着くな」

「同感。何て言うのかなあ……。ありのままでいられるって感じ？」

木にもたれながら、二人はそんな会話をする。するとふと、リッ
クがアイラのほうを向いて言った。

「また勝負しようぜ」

数日前、二人は勝負をした。結果はリックの負け……と言っても、
酔ったまま剣を振るったリックは自分で自分を叩いて、そのまま気
絶した。自滅という奴だ。それとも自害と言うべきなのか。

「こないだのはこっちまで馬鹿らしくなったよ。今回は大丈夫だよ
ね？」

「当然。んじゃ……っと。剣の代わりになりそうな奴無いかな」

第三者もおらず、ましてや城下町で真剣^{けん}を振り回すわけにもいか
ず、リックとアイラは足元に落ちている枝を探す。だがそこに、二
本のちょうどいい枝が差し出される。

「これでいいんじゃないか？ たぶん、丁度いいと思うぜ」

「確かに丁度いい。ありがとなア……って、誰だよ！」

差し出された枝の先に立っていたのは、1人の男。髪はそこまで
長くなく、右目だけ隠れて見えない程。色は黒に少し緑が混じった
深緑色。左手には竖琴。そしてどこか、不思議な雰囲気が漂ってい
た。

「知り合い？」

「いや……」

2人は男を、目を丸くして凝視する。男はその視線に合わせて、
苦笑すると、口を開いた。ぶっきらぼうで、乱暴な声。だがその中
にも繊細で、清らかな声が混じっている。不思議な声をしていた。

「俺は、名も無きただの詩人さ。ああ、名無しだと呼びにくいか……。そうだな、フィガートウン……、いや、長いな。フィガーと呼んでくれ」

この不思議な詩人、フィガーは軽い口調で自己紹介をした。しかし、二人はこの時には予想にもしていない話を聞かされることになる。

全てはここから、この詩人との出会いから始まったのだと、後になって気付く事になるのだった。

序章【？】 起点

「お前達は今、旅の起点が目前にある」

「起点ねえ」

「始まり、って事か？」

フィガーはそう、提言した。何故そんな事が分かるだとか、そもそも何者なんだという疑問は山のように浮かんできて、2人は気にせず、話に耳を傾けていた。数多くの疑問すら、全く気にならない程、彼には不思議な何かが感じられた。

——アイツが言うことなら、何でも信用しちまいそうだな……。不思議な奴め。

リックは口には出さず、頭の中でそんな事を考えていた。

「そう、起点は始まり、出発点だ。だが、終わり、終点という意味でもとれる」

「成程ねえ。んで、私達の目前にあるのはどっち？　ねえ、フィガ

ーさん」

「んーそうだな……」

アイラに爽やかに質問されたフィガーは、腕を組んで、しばし考える。自分で言った事で悩むのは、可笑しいかもしれないが、彼なりに意味があるのである。

「そうだな……。両方の意味で取れるな。お前らの起点は」

その口から出た答えは、また曖昧な物だった。

「って事は、終点で出発点。って事か？」

リックはフィガーの思う所を的確に付く。フィガーはそれを聞き苦笑すると、陽気な軽い声でそれへの返答する。

「ハハッ。全く持ってその通りだぜ。つまりは、そーゆーこと。一つの目的が近いうちに達成され、新しい目的……。新しい出発点が出来るとって訳だ。要は目的が果たされた後に、また新しい目的が出来るってわけだ。いやー御多忙だね」

「そういう事ねえ……。じゃあ、一つ質問いい？」

アイラは、胸の中の2つのガラス玉のネックレスを手で触りながら、かなり強い視線を向け、フィガーに1つだけ質問をする。その表情を横目で見たリックは、思わず後ずさりする。

「新しい目標って……何？」

視線をフィガーに合わせ、アイラはそう言い放った。かなり強い目線。いつもの目とは何か違う、アイラの目線。フィガーはその目線に臆するどころか、少し苦笑しながら答える。

「それは俺にもわからねえよ。自分で決めることだ」

「やっぱそうよねえ……」

アイラは、答えを聞いて納得したのか、それとも分かりきっている事を確認したのか。双方どちらでもなく、さまよっているのか。曖昧な返事が返る。

そのアイラに、フィガーは「ただ……」と、付け加える。

「もし見つけれられないのなら、たまには自分以外に^{すが}縋ってみるのもいいかもしれないな」

「縋る……か」

「おーい。お前、大丈夫か？」

先ほどからあからさまに様子がおかしいアイラに、リックはついに心配して訪ねる。少しの間が流れた後、アイラから返事が返ってくる。いつもと同じ、明るい、アイラらしい声で。

「大丈夫に決まってるでしょうが。まったく、何言ってるんだか」

「何言ってるって、コイツ……。まあいいか」

丁度その時、街中に通じる道から、三つの影が現れる。

「あ、いたいた。探したんだよー二人とも」

「まったくお前は。何でこんな町はずれにいんだよ。探すのに苦労したぜ……」

二人は探し疲れたのか、少し悪態をつく。もちろん、素から悪く思っているわけは無いのだが。その二人の後ろから、リユーナが現れる。だが、少し驚いたような反応をする。

「そうよー。わざわざ魔法使って探したんだか……って、随分と懐かしい顔がいるじゃない？」

リユーナの目線は、木に座っているフィガーのほうへ向いていた。

「つと、リユーナじゃねえか。もう二度と合わないかと思ってたぜ」
「何言ってるのよ。私だって、合うなんて思ってたわよ。でも合った。これ、何かの運命なのかね」

「どうだかな。ま、俺はもう消えるとするか。用も終わったしな」
「って事は……次はこの子達って事？」
「さあな」

リユーナとフィガーは、リック達からはよく理解できない内容の話を、短くする。

その話が終わると、フィガーは膝に手をつけて立ち上がる。リック達に背を向け、街中とは反対方向に続く道に向かう。だが、途中で立ち止まり、もう一度リック達のほうを見る。

「あ、そうそう。お前ら全員に一つだけ言っておこう」

返事を待たず、フィガーはとても美しい声で、こう語った。それは豎琴がよく似合う、詩人の姿。不思議な雰囲気だった。

「心には救う力もあれば、滅ぼす力もある。どう使うかは、お前次第だ」

そう物静かにフィガーは伝えた。

心の力の強さを、この時はまだ誰も気がついていなかった。そしてこの先の旅路には、多くの出来事が起こることも、まだ知らなかった。これは、リック達へ、ある意味での指南。そして忠告でもあった。

「じゃあ、次合う時まで元気でな」

気づけば、言葉だけが残り、不思議な詩人は風の中に消えていた。

記憶——信じる心

あれは、日の昇らない、寒い日の事だった。

アイツはあの日、私を置いて国を飛び出した。今思えば人の気持ちも考えず、向う見ずな奴だった。

——俺は、この国から飛び出す……いや、逃げ出すのかもな。

アイツは、国中が祭りで騒いでる中、私を森の中に呼び出してそう言った。

最初は信じなかった。時々言う達の悪い冗談かと思った。何を言うんだと、勿論言い返した。何度もだ。でも、それが本気だと分かった時、一緒に行くと言っていた。他に考えられなかったんだ。アイツがどこかに行ってしまうなんて考えられなかった。だが、アイツは断じて首を縦に振らなかった。

——逃げ出すだけなんだ、俺は。自分の国を放っておいて逃げる……それ以外の理由は無い。

私は必死に抵抗した。だが、何を言おうと、アイツは首を横に振り続けた。結局、私はアイツの言いなりになった。いや、なるしかなかった。アイツは一度言った事は曲げない、それは私が誰よりも理解している。だから察した。何を言っても無駄だと思ったんだ。

——俺は、絶対にお前の所に戻ってくる。国に追われようが、足が無くなろうが、絶対に戻ってくる。

分かれる直前、アイツは強い視線を私に向けながら、強くそう言った。

思いの籠った、強い言葉だった。

——私だって、何日経とうが、何力月経とうが、何年経とうが、絶対にお前を待ち続ける！

私も、そう言葉を返した。アイツの事なら、信じられた。アイツの約束なら、私は信じ続ける事が出来る。

——信じてくれるのか？ 俺を……。

——当たり前だ！

そう言って、私はアイツに抱きついた。次合う時まで、その温もりを忘れないよう、きつく、深く。

——ありがとうな。じゃあ、な……

そしてアイツは、最後に礼と私の名前を呼んで、日が昇らない朝、森の中に静かに消えていった。

アイツが出て行って、何年経ったのだろうか？ 未だにアイツは戻ってこない。戻るどころか、生きてるのかも知った事じゃない。何も私は知らなかった。

噂ではもう死んでるとか、他の女と暮らしてるとか、色々と聞く。どれも気に食わない噂だ。でも時々、本当にそうなんじゃないかと疑心暗示になる事もある。

でも、私は信じ続けた。アイツが言った“絶対に戻る”という言葉。

——結局、今年も帰ってこなかったか……

そうして今年も、日の昇らない一日が切なく過ぎ去った。

2章【?】 遭難

「ん……？」

リックは風の冷たさを頬に感じ、朦朧と目を覚ます。唇には塩辛い感覚、目はヒリヒリと痛み、瞼を開けない。右手にはサラサラとした細かい物が。左手は何か、心地よい柔らかさの物が。

自分が何処にいるのかは、すぐに判断出来た。砂浜だ。水が塩の味がするのと、何より耳から微かに波のざわめきが聞こえていた。

リックは寝たままの体制で、この状況に何故至ったか、記憶を蘇らす。

「そつか。俺、海に飛び込んで……。馬鹿な事やっちゃったな」

自分を自虐するようにそう言って、苦笑いする。そして考える。

自分が何で飛び込んだかを。理由は、それこそ目の前にあった。

リックはしっかりと、左手でアイラを抱きかかえていた。

「ってアイラ！ 大丈夫か？ おい、返事しろって！」

左手でアイラの体を起こし、空いている右手で肩を強く揺さぶる。そのせいで、アイラは不快な目覚めを強要される。しかも、目の前にはリックの顔。とても気持ちのいい物ではない。

「うう……。って、何をやって！」

「ああ、生きてるか。本気で死んだかと思ったぞ……」

「そう簡単に死……。んでたかもね」

アイラも記憶がはつきりしてきたのか、自分が置かれていた状況を把握する。そしてリックを指差して、驚き叫びながら言う。

「もしかして、アンタ海に飛び込んだわけ!？」

「ああ、そうだよ! 反射的に飛びこんじまったんだよ! 悪いか!」

「悪いに決まってるじゃないの! 普通死ぬわよ! 馬鹿じゃないの?」

「何が馬鹿だ! 見捨てるような真似、出来るわけないだろうが!」

いつものふざけた口論、リックはそのつもりだった。

だがアイラの声は、次第に素から出たものになっていた。そしてそれは、いつのまにか心の叫びに変わっていた。

怒りか、悲しみか、それとも両方か。そもそも、そのどちらの感情でも無いのか。リックには、その時は分からなかった。

「見捨てればいいでしょうが!」

アイラが強い剣幕で、最後に怒鳴る。いつものふざけての大声ではなく、素の叫びなのはすぐに分かった。リックはそれに押されて、口を閉じる。

怒鳴って下を向いたアイラの顔からは、少し涙が出ていた。

「何で庇うのよ……。何で、何でよ……。私が弱いから? ねえ!」
「ど、どうしたんだよ突然……」

いつになく、弱々しいアイラに、リックはどう対応すればいいか分からなくなる。今のアイラは、簡単に碎けそうな、ガラス細工のようだった。繊細で、弱々しい。普段の強気な態度からは想像出来ない、別の姿だった。

「放っておけばいいじゃない。私みたいな奴。私が居なかつと、アンタには関係ないでしょうが……。どうして、どうし……て」

最後には鳴き声になって、アイラは嘆いた。その途中で、力尽きたのか、心が折れてしまったのか。アイラの体は、砂浜に重々しく倒れた。

「おい、アイラ。大丈夫……！？ 凄い熱だ！」

「ハア、ハア。……さん。何で、何でよ……」

リックが倒れたアイラの体を抱えると、荒い呼吸をしながら、うなされていた。体は、近くにいれば熱気すら感じられるほど、火照っていた。さつきまでよく立っていたいられたなど、リックは思う。

「おい、シャイナ！ って、居るわけないよな……。慣れないけど、使ってみるか」

リックは、反射的に魔法使いの弟子の名を呼ぶが、ここは二人以外にない海岸。自分で何とかするしかなかった。覚悟を決め、リックはアイラに手をかざして、目をつぶる。頭の中で、小さな師匠の言葉を思い出して集中する。

『魔法を使うときは、それを使いたい！ っていう強い心が大事！』

—— アイラ……頼むから治ってくれよ！

「アキレア！」

リックが呪文を唱えると、弱い光がかざした手のひらで輝く。リ

ツクの魔法は成功。うなされていたアイラは静かになり、寝息を立てて静かに規則的な呼吸を始めた。だが、成功と言っても強い物ではなく、霊石も無し。気持ちが楽になる程度の効果だけだった。

それでも、応急措置にしては、十分な結果であった。

「ふう、なんとか収まったか……。なんか俺も疲れた……。ってヤバイヤバイ。これで俺まで寝ちまったらどうしようもないよな。しゃあない、とりあえず焚き火でも焚くか」

慣れない魔法で、体力を消耗した体に鞭打って、リックは寝床を作り始めた。

アイラは微かに残る意識の中で、リックを見て、こう言った。

「……ありがとう」

アイラのその言葉に、リックは全く気づかなかった。

2章【?】 遭難（後書き）

この小説を書き始めてから約三カ月……。やっと二章に入る事が出来ました！

これも、この小説を読んでいたいている皆様のおかげです。

これからも小説を読んでもいただける事を、心から願っております。
感想、いつでもお待ちしております！

2章【?】 酒場にて

時は、リックとアイラが遭難してから遡って、十日前。

リック達はリユーナの世話になりつつ、旅の準備等の時間を過ごしていた。

「アイラ、人波に吞まれるなよ」

「……はあ」

「何だよそのため息は」

そしてこの二人、アイラとヴェンはシフランの城下町に、買い出しに来ていた。

途切れる事の無い人海の、活気のある大通り。食糧、武器、薬、装飾品。さらには家具、家畜まで販売されている。旅に必要な物は愚か、生活に必要な物はすべてここで揃えられるくらいの品ぞろえ。さすがは世界の中でも三本の指に入る街と言った所か。

「ため息の一つや二つしたくなるに決まってんでしょ？ 何で私がアンタなんかと仲良くお買い物してるわけえ？ 可笑しいでしょ。野郎共と行きなさいよ！」

「じゃあねえだろ！ 他に相手がいねえんだから」

常に口論しているアイラとヴェン（リックともそうなのだが）が二人で買い出しに来ているのは、かなり不自然である。喧嘩するほど仲がいいと言うのなら、いいコンビなのかもしれないが。

「リックの野郎は『俺はまだ、諦めない！』とか言って魔法の練習中。シャイナはそれに付き合わされてると来た」

「まあ、シャイナは馬鹿に付き合わされてるだけだからしょうがないか。にしてもいいがげん、一つくらいは使えるようになったかしらねえ？」

「どーせ無理だろ。アイツには」

そう言つて、口論していたにもかかわらず、二人は必死に練習している彼の姿を想像して、笑いだす。

？
＋？
＋？
＋？
＋？

「ハックシヨン！」

「何いきなり盛大にくしゃみしてんの？」

「あー悪い悪い。誰か噂でもしてんのかねえ？」

「でも一回ならいい噂だからいいんじゃない……」

「ハックシヨン！」

「……笑われてるみたいね」

「ちつきしょう……シャイナ、もう一回だ！」

「はいはい……。にしてもリック、いい加減一つくらい覚えてよ……」

……

？
＋？
＋？
＋？
＋？

笑っていたのもつかの間。二人はまた口論に戻っていた。

「で、部下共は、船の点検と修理。つまり残るはアイラ、お前しかいないってわけだ」

指を一本づつ折って数え、最後に残った一本でアイラを指さす。それに癢を感じ、詰め寄る形でアイラは言葉を言い放つ。

「てか買い出しに女手って何よ？ どう考えても適材不適所でしょ！」

「いや、注文して船に直接届けてもらうから、関係無い」

「それったただ単に、一人じゃ寂しいから？ ハハッ、面白いわねえ」

アイラはニヤニヤしながら、汚い笑みを浮かべる。かなり図星だったのか、ヴェンは「うつ」っと息をつまらせる。

「うるせえな……。ホラ、あの店だ。入るぞ」

さっさと話題を変えたためか、速足で店の入り口へと向かう。アイラも迷うのはゴメンなので、まだ笑いを残しつつ後ろを追いかける。

しばらくすると、表通りから一つ曲がった角の店の前で、ヴェンは立ち止まる。だが、その店にアイラは疑問を感じる。店の名前は看板に書いてあった。

「お気楽な店、【ル・クラン・ラ・リヴィエール】によっこそ？」

「そつだ。お気楽な川の流れて意味だ。中々センスある名前の店だろ？」

「……はあ」

本日二回目、アイラのため息。

正直、センスがどうの問題ではなく、意味不明だと思うアイラ。名前以上に意味不明なのは、店の周りに、酒樽が積み重なっている事。

「じゃあ買い出し行くか。入るぞ」

「ちよつと待って……って、もう入ったのか。はあ……」

何だかんだでヴェンに振り回されているアイラ。いつもとはペー
スを掴んでいるのが逆なだけで、こうも展開が変わる物なのだ。

酒場の中は、酒の匂いが溜まっていた。ヴェンは当然として、ア
イラもこの匂いは好きだったりする。だが、今日は飲む気分どころ
か、さっさと買い物を終わらしたかった。

「さて、ここでどうやって買い出しするわけえ？ 返答次第では…

…」

アイラの手が、刀の辺りに移動する。要するに納得する理由で無
かったら一刀両断という事だ。だが、ヴェンは余裕がありそうだと
言う事は、本当にアテがあつてここに来た、というわけである。
ただの開き直りという可能性も捨てきれないが。

「分かった分かった。ちゃっちゃと終わらして戻るよ。おーい、マ
スターいるか？」

誰もいないカウンターに向かつて、ヴェンが声を上げる。反応が
無いので二、三回呼びなおすと、カウンターの奥から、中年辺りの
オヤジが出てきた。どうやらマスターのようだ。

「こんな昼間っから何だ、ヴェン？ いつものか？」

「いや、ちよいと長旅に出るもんだからな。品物を頼みに来た」

「ほほう、長旅ねえ……。目に見えない秘宝の次は何だ？ 天国へ
の階段か？」

「違う違う。今回はアテの無い放浪の旅さ」

マスターとヴェンが話を始める。マスターが酒を用意し始めてる
辺り、長話になりそうな雰囲気、アイラは感じる。

話かけても無視されそうなので、ヴェン達から少し離れたカウ
ンター席に座る。と、目の前に中身の入ったコップが、右から滑つて
くる。手でそれを止めると、少量が零れ、指が濡れる。かなり強め
のウイスキー。

アイラは指を少し舐めてからコップの出所を向く。

「ふうーん。何、私をナンパでもしようって？」

「いや、違うな」

コップの出所は、黒に青味がかかった髪の間。低い声の返事か
ら、その人間が男だというのが分かる。

そしてもう一つ、思う所があった。男から感じられる、只ならぬ
雰囲気。

「成程ねえ。じゃあ何でこれを？」

「お前は、俺の剣を^{これ}ずっと見ていた。だからなんとなく、一緒に飲
みたい気分になった」

と言い、腰の剣をトントンと指で叩く。アイラはそれに否定せず、
確かに見てたわね、と言い、質問を返す。

「何でそんな気分になるわけ？ 一人じゃ寂しかった？ それとも
……」

一度目に聞いたのは冗談だ。こんな雰囲気を持つ男が一人で寂し
い気持ちを抑えるために酒を飲むはずは無い。本題は二つ目。

「「同じ匂いがするから」」

低い声と、高い女の子の声が重なる。

「じゃあ、貴方のおごりって事で」

「ああ。まあ安い物だな」

そう言って、二人はお互いに苦笑した。

2章【?】 酒場にて（後書き）

今回一番書きたかった事。

ウイスキーを滑らせる所です…

いや、洋画とかに憧れてしまったのですよ。

2章【?】 次の目的

「船に乘せろだあ?」

「金は無論出す。航海中も力仕事くらいにならやれせてもらうさ」
かね

「いや、問題はそこじゃねえよ。何で傭兵が雇われても無いのに個人の船に乗りたがるんだよ? 密偵か何か? それとも連絡船に乘れないよほどの理由があんのか?」

結局酒場で一日を過ごしたヴェンとアイラ、そして酒場でアイラが出会った男。?人は仕事終わりの人間が歩く、夜の大通りを歩いていた。人波は買物に明け暮れる主婦から、酔っぱらう親父に変わっていた。

「その2つとも違うな。俺はただなんとなく、着いていけば面白い事になりそうな気がしてな」

酒場で出会った、黒に青味がかかった髪の子——名をラリー・ヒュイルと言う。どこか不思議な雰囲気漂わせる傭兵。影がある、という言葉がよく似合う。そんな人間だ。

「いいじゃんヴェン。ドーせ馬鹿みたいに部屋余ってるんだしさ」
「まーな。こつちも人出がアイツと他の船員じゃ足りない所だったしな。いいぞ、乗ってけ」

いとも簡単に乗船許可をするヴェン。気前がいいのか、それともケチなのか、つくづくよく分からない奴だと、アイラは頭の中で思う。ただ不動な気持ちは、ただの馬鹿野郎という所。

ラリーはヴェンの了承を得た事を確認すると、ポーチから革袋をとり出し、ヴェンに値段を聞こうとする。が、条件がある——と、

ヴェンが人差し指をかざして付け足す。

「金なんて物はいらねえ。ただし、客人扱いはしない。狎^なれ合いは無しだ」

また突拍子な条件を出すヴェン。この男の行動はホントよく分からないと、アイラはつくづく思う。そこがいい所でもあるのは、確かなのだが。にしても、また寒いセリフだ。

「金はいいのか？」

「いらねえ。あんなの所詮、金属の塊だ。この条件が呑めないなら、お断りだ」

ヴェンは何故か、金を大事に思わない。荒遣いするとかではなく、金という物の価値観がかなり低いというべきだろうか。欲が無いというわけでもなく（むしろ欲はかなりある）、金にだけ興味が無いのである。何とも不思議な男である。

「まあ俺は構わないが……。ヴェルドナ、だったか。本当にいいのか？」

「構わないさ。じゃあ交渉成立だな。よろしく」

「ああ。よろしく」

そう言って2人は、右手で承諾の握手をする。お互い、表情は苦笑だった。

？
+？
+？
+？

「あんたらに一つ、頼みがあるんだが」

夕食後の席で、リユーナが一つ提案をする。旅をしようにも、目的地が無い彼らへの題材提供と言った所か。そして顔はまた楽しそうにニヤニヤしている。

「これをフォーマスまで持って行って欲しいんだよ」

リユーナはそう言って、一通の紙をテーブルに投げ出す。ただの白紙の右下に、何かの刻印が押された紙。見れば分かる。魔法の類の刻印だ。

「師匠、これって封の刻印ですよね？」

「そうね。それも私がかけたね」

「って事は、相当強力……ってわけか？」

「まあ、無理に解こうとしたら1カ月、下手すりゃ半年くらいマトモじゃなくなるかもね」

リックの質問に、とびつきりの笑顔で回答する。それにリックの顔は、引きつる。つくづく恐ろしい人だと心の中で思ったのだろう。

封の刻印とは、手紙などに封をするような物である。無理に封を解こうとすれば、即刻魔法の餌食というわけだ。無論、手の込んだものほど解きにくい。

「で、ソイツは誰に届けるんだ？」

「『ガドラフ』ってジジイ、知ってるかい？」

「ガドラフ？」

その聞き覚えの無い名前に、リック達は首を傾げる。しかしラリーだけは、その名前を聞いて少し驚いたような反応をする。

「『ガドラフ・リイト』の事だろ？ 『風王』と言った方が早い
か」

「風王！？ それだとフォーマスの族長の一人じゃねえか」

西に広がる草原の国——フォーマスには王や皇帝と言った物が
おらず、複数の族長が話し合い、国を構成している。風王——ガ
ドラフはその中の一人であり、その中でも中核と言える人物である。
風王の異名の元は、三十年前の頂点戦争で、風の力を持つ弓で戦
い、活躍した事ともう一つ。風のように国を空け、行方が知れなく
なる事。この二つからの異名である。

「リユーナさん、何でまたそんな事。知り合いだったりしちゃうん
ですね」

「うん、しちゃうしちゃう」

「冗談で聞いたんですけど……。リユーナさんってホント“色々”
と違いますねえ」

「それって嫌味？ ……まあいいわ」

リユーナは毒ずいた表情を浮かべるが、咳払いをして状況を建て
直すと逸れてしまった議題を、本来の物に軌道修正する。

「で、この手紙をガドラフに届けてほしいわけ。神出鬼没の風王に
手紙を渡す。どう、中々いい旅が出来そうな素材でしょ？」

「まあそうですね……。いる場所の検討くらいはついてるんです
か？」

「いや全然。でも幸い、アンタらにはいい道具があるでしょ？」

そう言ってリユーナは、一つのボロい地図をテーブルの上に広げ
る。リックの自動的に地形が書き変わる、不思議な地図である。

「色々調べさせてもらったけど、やっぱりこれ、かなり高度な魔法がかけられているわ。しかもかなり年代物の」

「この地図がどうかするの？ 第一、こんな古い地図が正確なわけ無いだろう」

「あーそっかあ。ラリーはまだ知らないんだっけか」

アイラは簡潔に、地図の説明を始める。

「この地図は変わった地形が勝手に書き変わる謎の地図で、最近の地殻変動の変化もきっちり書きかえられるってわけ」

「成程……。面白いな」

だが、謎のままというのも何なので、魔法に詳しいリユーナに調べてもらったというわけだ。

この地図に施されている魔法は、かなり古代的であり、現在では唱えられる人間はいないと言われている……と、リユーナは言う。

「で、調べた所、簡易な人探しの魔法も施されてるのよ、この地図」「じゃあ師匠。風王の居場所が分かって事？」

「そう。と言っても、細かい場所まで分かりやしないけどね。せいぜいどの地域にいるかくらいね」

「それだけありやなんとかなるさ。でも、どうやって分かるんだ？」
「今から、私がガドラフの目印を地図に入れるのよ。まあ見てれば分かるわよ」

リユーナは、広げられた地図に右手を翳し、呪文を唱える。最後にガドラフの名を言うと、手を地図に付ける。数秒立って手を離すと、ガドラフと名の書かれた円形の刻印が、地図上に現れた。大きさはこの町——シフランほどの大きさはある。

「これがガドラフの目印よ。今はこの円の範囲のどこかにアイツはいるわ。まあ、後は自分たちでなんとかして」

「まあ、これくらいまで絞れば何とかかなりそうだな」

「場所は……、ルフェルか。結構距離があるな」

ルフェルはフォーマス首都、ミゲルから東に進んだ半島にある町である。どちらからと言うと田舎だが、伝統ある武器練成技術があり、ルフェル産の武器はフォーマスで根強い人気がある。それでも、田舎なのは変わらないのだが。

「ねえヴェン、出港準備は済んでるの？」

「ああ。明日の朝にでも出港出来る」

仕事をやり終えた声で言う。その時の自信満ちた声は、ヴェンの船長としての資質を現しているようだ。

「出発は早いほうがいいわね。放っておくと、ガドラフも遠くに行っちゃうわよ」

「だったら明日出発しようぜ」

「もうちょっとここで遊びたかったんだけどねえ……。しゃあないか」

「じゃあ出発は明日か。心得た」

若干未練がましい所もあったが、リック達は明日の出発を決める。それはファイガーが言っていた起点なのか。それともまだ過程なのか。それは分からないが。

「さあーで、ラリー。一勝負しないか？」

「ギャンブルか……悪くない。やらせてもらおうか」

「うわー、ここの極楽生活も終了かぁ……。シャイナ、今から銭湯

でも行かない？ 当分マトモな風呂に入れやしないわよ」
「そうだね。じゃあ行こっか」

フィガーが言う、新たな旅の起点。それはこの事が、それとも既に起点は通ったのか。ましてや起点に辿りついてすらいないのか――そんな事をリックは考えていた。

「ちょっと話があるから、付き合いなさいな」
「ちょ、リユーナさん。何の用……」

一人でボーっと考え事をしていた所に、リユーナに肩を叩かれ、返事もままならない内に、リックは月が照らす外に連れ出された。先ほどとはかなり違う雰囲気。真剣な様子のリユーナ。彼女はリックの目をじっと見つめながら、静かに用件を告げた。

「デイルの事、少し教えてあげるよ」
「……親父の事？」

リックは父親の知らない過去を、この時垣間見る事となった。

2章【？】 嵐の余興

船の甲板で肘をついて、広い世界のどこからか流れてきたであろう生温かい風を、リックは受けていた。

——デイルとは、昔旅をしたのよ。丁度、今のあんたらと同じね。

「……」

右腕に付いている、父の肩身——銀色の腕輪をじつと見つめながら、リックは何度も、リユーナとの会話を、頭の中で繰り返していた。

——え？　どんなだったって？　そりゃー今のリックとそっくりよ。単純で、無鉄砲で、好奇心旺盛。そして何より、近くにはいつも仲間がいた。私もその中の一人だったわね。

——そっくりだったか……。親父の奴、偉そうに言う割には大して変わらなかったんじゃないか……。

自分の昔話、そしてリックの記憶に無い母親の話。全く語る事の無かった父親。隠したいという雰囲気ではなかったが、昔の事を聞くと空を仰ぎながら黙り込んでしまったり、今は形見となってしまう腕輪をぼんやり見つめたりしていた。だから、リックはデイルの昔話を聞こうとはしなかった。いつか自分から話してくれると思って、尋ねないでいたのだった。

しかし、リックが自分の父親の昔話を知りたいと思った時には既に、デイルはこの世から去っていた。

聞く事が出来なくなった父親の話。デイルの交友関係もロクに知らないリックは、父親が生きた時の物語を知る事が出来なかった。唯一の手掛かりは何も語らない、形見の銀色の腕輪。それを見続けているうちに、時だけは無情に過ぎていた。

——なあリユーナさん、一つ質問いいか？

——まあ内容によるわね。

だからこそ、この唐突に訪れた物語を知る機会。リックはようやくこの質問を、答えの知る人物に問う事が出来たのであった。

——じゃあ、この腕輪……

？＋？＋？＋？＋？

「……ンス、レーランス。聞こえてるのか？　だったら返事をしろ」
「……ん？　ああ、ラリーか。何だ？」

リックは頭の中の妄想から、一気に現実の世界に引き戻される。一体どれくらいの時間ここにいたのか、自分では覚えていない。時間感覚まで吹き飛んでしまうほど、物思いに耽^{ふけ}っていたのだ。

「何だって……。お前、海が今どうなってるか分かるか？」

あまり表情は変えていないが、声質が明らかに違う。ラリーは心底呆れている声をしていた。

「海……？　ああ、波がおかしい事になってるな……」

やっと意識が頭の外を意識し始めたのか、リックが海の変化に気づく。海は時化^{しげ}始め、風は音を立て強く吹き荒れている。

船の後方、舵のある所に、ヴェン、アイラ、シャイナは地図を広げて話していた。地図はリックのボロである。陸図だけではなく、海図も正確な情報を記す事から、ヴェンに貸しているのである。

「おいヴェルドナ、どうなってるんだこの海。こんな妙な荒れ方、見た事無いぞ？」

そう言って空を仰ぐ。雲は渦巻くように動き回り、ゴロゴロと雷が音をたてている。この時期の海は、比較的気候は安定しているはずなのだが、そんなのはお構い無し。

「俺も始めてだ。だが現実、海はご機嫌斜めだ。ぐちぐち言っている暇なんかなさそうだが。じゃなきゃ、さっさと沈むか」

「沈むって……。やだ、怖い、アイラ……」

アイラの腕にしがみ付いて、シャイナは怯えていた。まだ子供っぽ所があるなど、アイラは思いながら、その小さな手を握っていた。

「で、実際問題どうなってるの？」

「まあ落ち着け。こういう時こそ状況確認だ」

ヴェンは開いている地図の一点を指さす。場所はレスターの北東の海上、ここが現在位置である。出港前のヴェンによれば、この季節に流れる、ウェストレスター海流に乗り、このまま南西に進み、フォーマスの南の町、ウェロンに到着する予定だった。

海流に乗るまでは予定通りなのだが、現状、今海は大荒れである。この季節にこの地域の海が大荒れする事はないはずだと、ヴ

エンは説明したが、見事にこの様である。

「でだ、今行ける進路は二つ。このまま予定通りに南西に進み、ウエロンに付く。そしてもう一つは、南に進路変更し、レスターに行くか……だ」

ヴェンは指で進路を示しながら、丁寧にそれを説明する。ラリーだけは話を理解し、相槌を打つが、他の面々は完全にお任せ状態である。

「まったく、頼りにならねえ連中だな……。ラリー、どっちがいいと思う」

「一度レスターに行つて、様子を見るべきだろう。と言っても、俺はそこまで詳しいわけではない。船長殿の意見は？」

「いいや、いい判断だ。よし、それじゃあレスターに舵を取るとするかな。それで文句無いな？」

こういう時のヴェンは、お調子者の馬鹿では無く、頼れる船長だった。ただ、実行に移す内容を理解してくれる人間が、船員を除くとラリーしか居ない。そのせいか、頼れる一面のイメージはどうも目立たず、軽い部分が際立つて目立つ。なんとも不遇な男であった。

「よく分かんないが、それでいいと思う」

「私も。近い方が安全なんでしょ？」

「こんな海からさっさと出ようよ……」

ラリー以外の三人は、今の危機的状況の回避方法を、どうも重要視していないようである。その姿に、ヴェンは心底呆れ、ラリーに縋るように同情を求める。

「俺の言っている意味を理解してくれるのはお前だけだ……」

「それはどうも。さて、指示をいただこうか」

「無論、指図させていただくさ。よし……」

そう言つてヴェンは、バンダナをきつく締め、全員に言い放つた。

「俺がいる限り、この船——ミストラルは沈ませねえぞ！」

2章【?】 声

「おいワンド！ 状況は？」

「舵はもう駄目ですね。船体もヤバいです！」

怒鳴るように話さないと言は耳に届かない程、海は轟音をたて、風は唸り声をあげていた。船体は大きく揺れ、木がきしむ音をたてる。ここまで荒れる海は、一生でも早々お目にかかる事は出来ないだろう。もっとも、女二人とリックは、船旅自体が体験の薄い物なのだ。

「ここまで来ると、運が悪いとしか言いようが無いですね！ 船長、海神を怒らすような事してませんか！？」

「知るかよ！ 俺は迷信を信じないもんでね！」

と言うが、神を恨みたい気持ちは、ヴェンにもあった。それ程絶望的な状況なのだ。

船体は大きく左右に揺れ、舵は全く効かない。何かに捕まっていなければ、すぐにでも海に投げだされる。風は轟音を鳴らし、唸る。雷は休む事無く、どんよりとした雨雲を、光らせていた。

「あつ……！」

船体に、巨大な波が襲う。その衝撃で、船体が大きく傾く。その瞬間、小さな体が一つ、言葉にならない悲鳴と共に、宙に投げださる。

「シャイナ！」

シャイナが海上に投げ出され、落下し始める直前、小さな右手をアイラが掴み、船体に引き戻した。それと入れ替わるように、アイラが船体から投げ出され、海面に落下する。身代りになったのだ。

「おいアイラ！ …… ちつくしょう！」

「おいハ・デインス、よせ！」

ラリーの忠告を無視し、自分の体の半分ほどの樽を掴み、海面に向かって、自らリックは飛び込む。気付いた時には冷たい水に体は包まれ、塩辛い味を唇から感じる。海水は凍えるほどでは無いが、十分冷たく、全身の感覚を痺れさせた。

「アイラ！」

「…りつ…く？」

「いいから捕まれ」

リックは、海に浮かぶアイラを捕まえると、密着するほど引きよせ、抱いた。お互いの吐息が、肌で感じられるほどの距離。だが、そうでもしないと、すぐに引き離されてしまう。

船は既に、視界からは消え、見えるのは荒れ狂う海と、お互いの顔だけだった。やがて意識は薄れ、重い瞼が落ちる直前になった。た。

『貴様、その彼女と共に生き残りたいか？』

—— 誰だ？

そんな夢うつつの意識の中、リックの耳に、重低音のある声が響く。その言葉に対し、リックは心で答える。何故言葉にしくても会話が通じるのか、そもそもこの海の上に自分とアイラ以外の人間がいるのか？ そんな疑問は抱く余裕も無く、会話は続く。

『貴様は、我に助けを求められる権利がある』

—— 何でまた、そんな奴になつてゐるんだ俺は？

『その腕輪こそ、その印』

—— 腕輪……

リックは、ある日を境に肌身放さず付けている、右腕の銀色の腕輪を見る。だがそこには、いつもの腕輪は無く、代わりに黄色く光り輝く輪が腕で輝いていた。

『代償は1つ。いずれ我と戦う事とな』

—— 戦う……いいだろ。それで助かるんならな

即答。考える必要など、リックには無かった。この状況から助かるには他に道が無いのと、戦うのも、目標が1つ増えるならば、別にいいと考えたからだ。

『よかるう。では、次に会う時を楽しみにしているぞ』

会話が途切れると同時に、リックの意識は遠くなる。意識が飛ぶ直前、夢うつつな状態で、嵐の中に2つの緑色の光が輝くのをリックは見る。神秘的、なおかつ不気味な、海に輝くその光。何故かそれ

は、リックにとって見覚えのある、そんな気を起させた。

『では、しばしの別れだ』

その言葉を聞き終え、リックの意識は遠くなっていた。

2章【?】 見知らぬ大地

「二体か。一人一体で丁度いいな」

「そうね。さあて、どっちが先に倒せるでしょうかってねえ。あ、後の方は今晚の見張りね」

二人は今、山に生い茂る深い森の中を進んでいた。木々の隙間からは頭に雪を被った山が顔を出し、開けた場所を見れば、二人が流されてきた広大な海と、それに流れ出る途方もなく長い川を覗く事が出来る。

一般的に言えば絶景と呼べるほど美しい物なのだろうが、今の二人からしてみればただの忌々しい大自然の象徴である。人の息がかっている街並みが、恋しく感じているような状況でもある。

遭難しているからと言えば、当たり前なのだろうが。

「いいだろう。約束は守れよ？」

「勿論」

二人の前に立ちはだかる魔物、ホーンディアー。鹿のような体を持つが、体長は背中の高さガリツクの胸の辺りまでであり、頭はほぼ同じ高さ。自身の首とほぼ同じ長さを誇る、先端が鋭く尖った二本の角を武器に戦う凶暴な魔物。その角は様々な物に流用出来、工房を始め様々な職人からは貴重とされている。腕の立つ者が加工すれば、それは軽く、強度は鉄以上。そして繊細でとても美しくなる、とまで言われるほど。

人とは欲深いものであり、その角を狙って幾人がホーンディアーを狩りに行くのだが、その凶暴さと強い戦闘能力が故に、返り討ちに遭う者が後を絶たないという。

「ねえリック。コイツらの肉って、確か相当上手いんだよねえ？」

鰐に親指を立て、ホーンディアーを見ながら、アイラは目を輝かせそう言う。ここ数日、肉に有りつけていなかったためか、それに有りつけるのに期待した声。貴重な角を前にしても、食のほうが優先というのにリックは内心笑ってしまう。自分も同じというのも、それを後押ししているのだが、

「ああ、俺も食いたいもんだな。ホーンディアーのフルコース。逆に、俺達がフルコースにされるかもしれないけどな」

リックの言葉に反応するかのように、二体のホーンディアーは興奮した鳴き声を上げ、その強靱な角を二人に向ける。思わず、反射的に一步身を引いてしまう。

汗が滲む手で剣を抜き、構える。それを節目に、一体のホーンディアーが砂埃と蹄音^{ひづめ}を上げながら、リックに襲いかかる。四本の足による、全速力の突進。そのままの勢いで角が刺されば、間違えなく肌色の皮膚を貫通し、体内の臓器を破壊するだろう。

つまりは、即死。

「当たってたまるかよ！」

ホーンディアーの突進を、右へのサイドステップでリックはかわす。標的を失ったホーンディアーは、力の行き場を失い、急停止する。すぐにその勢いを殺したのは誤算だったが、リックはその隙を突き、剣を振り上げ、縦切りを仕掛ける。

「ウソだろっ!？」

しかし、ホーンディアーは砂煙を立たせ素早く反転。前足に体重を掛け、リックに標準を定める。勢いよく切りかかったリックにそれをかわす余裕は無く、砂埃の中から現れた後ろ足に吹き飛ばされ、背中を大木に強打する。

「……っ！」

息がつまり、声の無い空気を吐き出すだけの悲鳴を、リックは上げる。ホーンディアーがそのチャンスを逃すわけ無く、すぐさま方向転換し襲いかかる。

「食らえ！」

素早い攻撃に立ちあがる事も許されないリックは、渾身の力で自身の剣を投げつける。ホーンディアーの額にそれは命中し、減速する。尻を地面に付けた体勢からの投擲だが、一時的に動きを止めるには十分だった。

「うおおおおお！」

額に当たり、地面に落ちた剣を、リックは突撃すると同時に拾う。目の前に迫られたホーンディアーは、前足を上げ、蹄を振り下ろそうとする。だが、リックにとっては最大のチャンス。ここぞとばかりに空いた懷に入りこみ、剣を斬り上げる。

剣がホーンディアーの腹を切り裂き、噴出した赤い返り血をリックは浴びる。ホーンディアーは痛みで甲高い鳴き声を上げ、その場に倒れる。だが、ホーンディアーは深い傷を受けながらもなお、そこから立ち上がるうとする。眼光は今もなお、殺気に満ち溢れていた。

「……」

リックはとどめを指すべく、剣の柄を両手で持ち、ホーンディアの喉元に剣先を向ける。そのまま腕を振り上げ、剣先をホーンディアの皮膚に向かって振り下ろした。

「とどめだ！」

冷酷な言葉と共に下ろされた剣は、その喉元をいとも簡単に貫いた。あれほどまでに脅威だった魔物も、こうなってしまうばただの鹿と変わらない。絶命の鳴き声を上げ、二、三回痙攣すると、ホーンディアは虚しく、その場で事切れた。

「どーやら、私のほうが早かったみたいねえ。さあーて、今晚の見張りはよろしく」

リックの背中に、勝利に満ちた高飛車な声が当たる。振り向けば、返り血を服に浴びたアイラがいたずらっぽい笑みを浮かべ、立っていた。

「お前、随分と余裕そうな顔してんのな」

だが、よくよく観察すれば肩で息をしており、どう見ても強がり……よりかは、見栄を張っているという事は、容易に予想出来た。

「当たり前でしょ。アンタよりよっぽど強いんだからねえ。あれくらい楽勝よ」

「ふざけるな。勝負は五分五分だろうが」

「な……、1本は無効試合よ。だから私の勝ち越し」

——調子がいい奴だな。

そう思いつつも、無事なアイラの姿を確認してリックは少し安心したのだった。

アイラも内心では同じ事を思っているのに、リックは気付く術は無いのだが。

「ちつ、しょうがねえな……。さてと、今日の寢床は……。あの洞窟みたいなのでいいよな」

リックが一つの洞穴

日の半分は既に山の中に隠れ、気温も徐々に下がり始めていた。山の気候というのは、気温の上がり下がりや女のように激しいのだ。なので、生身で外で寝るなどという事は、自ら風をひきにいつてるような物。

幸い、この辺り一帯は地殻変動の影響なのか、洞穴のような所がいくつもあり、寒さのせいで寢床に困る、という事はあまりなかった。

中で火を焚き、食事を済ませた二人。服の血は草の葉で拭き取ったが、まだかなりの赤黒い返り血の後が残っている。どの道これ以降も浴びる事になるだろうと思い、二人はそこまで気にはかけなかった。

特にする事もなく、ふとアイラの顔を見たリックは、顔色があまり良くない事に気づく。俯いて、どこかぼーっと遠くを見ていた。

「お前、やっぱり治りきって無いだろ」

「別にもう大丈夫……って、え？」

アイラが話しかけられた質問に反応する頃には既に、リックの手のひらが自身の額にあった。突然の事に啞然とするしかなかった。

「……」

「やつぱ熱っぽいじゃねえか」

妙に冷たく、そして大きい手。それは男の手であって、異性の手。そしてアイラは女なのである。リックはそんな事にためらわず、こうした行動を起こしている。アイラはどうしてか、悪い気はしていなかった。

ただそれを素直に受け取れるかと言えば、そういう訳でもない。

「つつても、薬も無いからどうしょも……って痛てえな！」

「勝手に触るなつての！ 私は寝るから、見張りきちつとしてなさいよ」

リックのその軽率な行動に、アイラはリックの肩に思いつきり拳を振りかざし、額の手を振り払う。決して本気で怒っているわけでは無いのだが、はたから見れば男が女の身体にいきなり触れるなど、恋人でも無ければ普通ではない。

アイラは背中を向けて寝そべると、黙り込んでしまった。リックに悪気は一切無いのだが、いつもその親切は裏目に出してしまう所が傷なのである。

「ちょっとくらい、こっちに頼ったらどうなんだ……まあいつか」

一人言をアイラの背中に投げかけながら、リックは焚き火の前の石に腰を落着ける。今晚は見張りだ。

やる事もなくしばらくぼーっとしていると、今日倒したホーンデ

イーアから取った皮をリックは取り、それをナイフでなめし始める。
上質の皮をナイフで擦る独特の音と、焚き火がパチパチ鳴る音が
洞窟に静かに響いた。

「今晚は冷えそうだな……」

そう、小さく呟きながら、リックはひたすらそれに没頭するのだ
った。

——人には必ず、欠点と利点が必ず存在する。万能な人なんていりやしない。俺はそう信じている。

地道に働く商人、詩を唄う詩人、金をばらまくように使う金持ち、馬鹿みたいに態度をでかくして大通りを占領する王族。俺はどれも腐って見えた。とにかく汚れているんだ。勿論、その中には俺も入っている。当たり前だ。人は腐った所ばかり目立って見えて、見る生き物だからだ。ただ昔は、俺だけは違うと、ずっと思いこんでいたがな。

自分という存在以外は、何もかも信じられなかった。理由は二つ。俺には家族が居なかったのと、自分以外を全く信用出来なかったからだ。俺は一人で生きてきた。形だけの仲間こそ居たが、一人、また一人とその姿は日を重ねるにつれて、世という不条理な世界から姿を消していった。何故消えたかは、詳しくは知らないが、大方二通りだ。生きる術を失って干からびたか、あるいは殺されたかだ。

ある日、俺はよそ者の船乗りを見つけた。大して金持ちには見えなかったが、身に付けているナイフの装飾が豪華だったので奪ってやろうと思ったのだ。だがソイツを狙った決定打は、何よりよそ者という所だ。よそ者は町はずれをうろつくとうなるかを知らない。

しかし、何年も人の財産を奪いそれを生活の糧にしていた俺だが、ソイツの物を取ろうとした時、あっさり捕まり、船の倉庫にぶち込まれた。今思えば、一人で行かず仲間でも呼んでおけばよかったんだ。全く、思い出せば思い出すほど馬鹿だったな、俺は。

今まで何人も見てきた、この国での末路。捕まった人間の末路は

十中八九奴隷になるか、殺されるかだった。女だったら妾にされる事もあるらしいが、それはほばありえない。そりゃそうだ。捕まるような事をする奴に、妾にしてやろうという気持ちを芽生えさせるような女はそうそう居ない。まあ、俺は男だからその辺りは関係ないが。

その時、俺は死を覚悟した。いや、生きたとしても奴隷にしかないんだ。自分で死んじまおうと思った。だが生憎、倉庫なんかに自殺出来そうな道具は無かった。じゃあ舌でも切るか……そう思った時だった。倉庫の扉が開いた。開けたのは俺が窃盗しようとした男。そしてソイツは、予想外にもしない言葉を、俺に言ったんだ。

—— お前はまだ、世界を知らない。知りたければ俺と来い。

そして男は俺の目の前に、一本のナイフを放り投げた。果物を切るためにあるような生易しい物では無い。人を殺すために作られた、凶器としての武器。

—— 何でコイツを渡す？ 俺はこれでお前を刺すぞ。

—— どうだかな。俺はお前が俺を刺す勇氣があるとは思えねえ。

せいぜい自殺が関の山だろうよ。

—— ！？

そんな時の俺の顔は、恐らくとてつもなく滑稽だっただろう。見事に凶星だったんだからな。ただ、あの時も俺はその後聞こえてきた男の笑い声に血が登り、ナイフを鞘シースから抜いた。冷たい刃を男に向け、腹にそれを向ける。だが、男の言った通りだった。俺は冷たい刃の先端を、ソイツの腹で止めた。そう、結局俺は殺せなかったんだ。振るえた手はそれを冷たい床に落とす。そのナイフを見ると、切っ先だけ、赤くなっていた。

そしてソイツは微動だにせず、俺に一步だけ近づいてこう言った。その言葉が俺の人生を変えた——いや、決めたと言った方がいいだろう。それほどまでに衝撃的で、壮大で、優しい言葉だった。

——一緒に世界を回ろうぜ。そして探そう、世界で一番美しい物をな。

俺は啞然としたよ。当たり前だろ？ 普通さっきまで自分を殺そうとした奴にこんな馬鹿らしい事言うか？ 少なくとも俺だったら、ソイツをひっ捕まえてぶちのめす。だが、男は俺に紛れも無くそう言っただ。

この日から、俺の世界を回る旅は始まったんだ。

2章【?】 違和感が走る

「ラリー、シャイナの様子は？」

一生に一度見舞われるか見舞われないかほどの嵐から、命からがら三人が逃げ出してから早くも五日が経った頃。ヴェンの船、ミストラルは砂漠が大部分を占める島国、レスターの首都エミングルに停泊していた。

レスターは王に実権は無しに等しく、富を手にした貴族達が中心となって繁栄している国。その格差社会は厳しく、奴隷商なども盛んである。勿論反対する人間もいるのだろうが、それが公になる事は無い。なる前に金の力でもみ消されるか、闇に葬られ存在すら消えてしまうから、である。

その中のエミングルは、レスターの中で数少ない……いや、唯一と言っていいか。街が広がり、市が並ぶ巨大な都市。世界一の商業都市と名高い賑やかで、活気にあふれている場所だ。

だが、レスターのほとんどは砂漠が永遠と続く辺境の地。そこで暮らす人間は水も限られ、昼は熱い日差し、夜は冷たい砂嵐が吹き荒れる厳しい環境で生活している。

光ある所にまた 影もあり

美点があるかぎり汚点は消える事は無い

それが世の常であり 哀しき現実かななのである

そう、吟遊詩人は静かに詠うのだと言う。

「変わらないな」

「そうか……」

今回の嵐で、船は外装はおろか、帆、船底を始めとする多くの重要箇所に大きく被害が出ており、よくここまでたどり着いたと船大工にも心底驚かれていた。仕舞には、『あいつらの船は、実は幽霊船じゃないのか?』と、ちょっとした酒場のいい話のダシにまでされてしまっていた。

物理的な傷は時間と金を費やせば、どんな物でも大抵の場合は直す事が出来る。しかし、心の傷はそう上手くはいかない。いくら豪華な食事をして、高級毛布のベットがある宿に泊まって、それは癒えない。溺れるほどの酒を飲んで酔いつぶれば忘れられるかもしれないが、次目を開ければまた傷は浮かび上がる。それほどまでに大きい傷跡を、あの嵐は残していったのだ。

「まあ、今はそつとしとくのがいいだろう。俺達にはそれを最善……いや、それくらいしか出来ないと言った方が、上手く当てはまるのかもな」

「ああ。にしても、人は無力だ。たった二人も助けられなかった。それどころか、一人に深い傷まで負わせてしまった」

「へっ、全く持ってその通りだよ」

と言い、大きめのジョッキに入っているウイスキーを口に流し込む。まだ朝飯の時間帯なのだが、このヴェンという男はどうも酒好きなのでこの時間からでも特に抵抗は無いらしい。

対するラリーも、付き合っているのか同じ大きさのジョッキを右手に持ち、左手に硬く、黒いライ麦パンを持っている。

「さてと、ずっとテーブルに腰を下ろして飲んでくれるのも中々一興だが、生憎やる事があるからな。飯食ったら、せつせと働くとするかな。勿論、手伝ってくれるよな?」

「俺は傭兵だ。願望なら、俺は動かないぞ」

真面目な顔でそう答えるフリ。ヴェンはそれに対し、苦笑し椅子から立ち上がりながら、こう返答する。勿論、鼻で笑いながら。

「じゃあ命令だ。仕事しろ、この傭兵野郎が」

「報酬の分は、な」

そうやって、ライ麦パンの最後の1欠片をウイスキーで流し込むのだった。

?
 †
 ?
 †
 ?
 †
 ?
 †
 ?

「暑いな」

「ああ、この暑さは何回来ても慣れねえな。自然の熱さじゃない、人の熱氣つて奴はよ……ん？」

「どうした、ラリー？」

「いち……」

ここはエミンゲルの商店街。眩しく照りつける昼の日差しに見舞われながら、人々は買い、売り、そして富を蓄える場所。そう、この場所こそ国の繁栄の要、商業都市の中心地。

日が傾き始めているかという時間帯。もう市が閉まる直前にもか
かわらず、人は右往左往し、いかに自分が儲けられるか、どうした
ら敵を蹴り落とせるのか、そんな方法を必死に模索しているようだ。

二人は朝から今現在まで、航海に必要な食糧を始めとする様々な品を買いも求めていたのだが、何故かどこも売る事を控えてきたのである。

「それにしても、普段から入手にはここまで困るものなのか？」

回りの店のやり取りや、雰囲気を見る限り、この国が普段と様子が違う事は、容易に想像出来た。町全体が、よそよそしい空気でつまれているのだ。そうになると、売ってくれない理由はかなり絞られてくる。

「いや、問題が無ければ半日もかからず俺の船に積み込む分の量は手配できる」

「まあそうだろうな。我ながら馬鹿な事を聞いた。さてヴェルドナ、今日はもう市も閉まる。この辺で諦めないか？」

「そうだな。さてと、ならこっちだ。ちょっとばかしい所に案内してやるよ」

ヴェンが親指で指差した方向は、街外れの裏通り。人通りは無く、一日中日陰なのか、冷たい独特の空気で覆われていた。商店街の表通りに並ぶ酒場では無く、わざわざヴェンはこの場所を選んだ。

その理由はただ一つ。二人が先ほどから感じている違和感の正体を暴くため。

「さてと……、いい加減出てこいよ」

誰もいないはずの裏路地の影。そこを傭兵の経験で培った鋭い眼差しで睨めつけながら、ラリーはその暗闇に言う。だが、返事は無い。

「返事しないんだったらこっちから行くぞ、お嬢さん」

続いてヴェンが軽い調子で問いかける。だが右手はしっかり腰のナイフに触れており、警戒は全く解く事は無い。それでもなお、返

答は無い。

「中々遊び心溢れてるじゃねえか。だったら……それっ!」

ヴェンは脅しでは無いと証明するためか、腰のナイフを薄暗い路地に向かって投擲する。すると、それは金属と金属が衝突した高い音と共に地面に落下し、代わりに髪を三つ編みに纏めた銀髪の少女が姿を現した。

「やはりバレてたか。つま、こんなのも分からなかったら、とうに奴らに殺^やられてる、か」

そう彼女は笑うように言いながら、先ほどヴェンが投擲したナイフを器用に足でけり上げ、手でその柄を掴む。それをクルクルと手遊びしながら、ヴェンとラリーを試すような視線で見つめる。

「……」

ラリーは無言で腰の剣を抜き、少女にそのギラリと輝く切っ先を向ける。だが少女は動じる事はせず、強きな口調を崩さずに一歩ずつ、二人にじりじりと近づいていく。

「あーあー、そんな物騒なモン向けないですよ。別にアンタらを付けてるのはただの興味心であって、殺すつもりも物取りするつもりも無いからさ。ホラ、これ落とし物」

少女は喉元に突き付けられている剣に臆する事無く、先ほどのナイフの柄をヴェンに向けて差し出す。普通、このような状況で武器を返すなどという事は、どう考えても馬鹿としか言いようがない行動。それを理解してか、ヴェンは軽く苦笑しながらそのナイフを受

け取り、元の位置に戻す。

「ほー、なら、ちょいと聞きたい事があるんだが。どうだ？ 酒でも飲みながら」

「おー、話が分かる男だね」

「おいヴェルドナ。一日中俺達を付けてた女だぞ？ 信用もあつたもんじゃない」

傭兵の経験上からの教訓からか、ラリーがきつめの口調でヴェンに反論する。が、ヴェンは人差し指を立てて、ラリーの口の前にあてて言う。

「いやいや、折角いいお嬢さんがお誘いに乗って下さってるんだ。それに、お前は俺に雇われてるんだろ？ だったら護衛でもしてくれよ」

こう言われては、事実上雇われの身のラリーは何も言い返せない。傭兵とはそういうものだ。捨て駒にされようがどうしようが、雇い主には逆らえない。ラリーは仕方なく少女に向けていた剣を下ろし、鞘にその刃を戻す。

「でもよ、名前くらいは聞いておかねえとな。俺はヴェルドナ・クアイス、ヴェンって呼んでくれ。ほら、お前も自己紹介くらいしろよ」

未だに少女を睨みつけていたラリーだが、ヴェンに促され仕方なさそうに軽く挨拶をする。

「俺の事はスレイヤーと呼んでくれ」

勿論、スレイヤーというのは偽名である。本名を教えないのは、信用していないという心の現れだった。

そんな雰囲気を感じた少女は、つまらない男とばかりに目で睨みつけてから、咳払いをする。

「ふーん、こっちは愛想が無いね。でだ、私はリーダー・ランスリィ。まあ、よろしく」

そう言っで、少女は小悪魔のような不気味な笑いを見せた。

2章【?】 宴会

——私は、私はまた助けられたんだ……。

日が暮れたにもかかわらず、明かり一つ灯さずに暗闇に覆われてしまっている宿の一室。その部屋の窓際の椅子、部屋の暗闇に溶け込むかのように一人の魔法使い見習い——シャイナが俯いて座っていた。

彼女は気づけば一日、いやそれ以上か。ずっと窓から見える港の風景。レスターの国旗を掲げた船ばかりの中ただ一つ、ミストラル号はディースの旗を掲げていた。これは、この国に無事に辿りついた証でもあった。

——どうして、どうして助けたの？

遡る事七日前。ここ数年の中で最大規模の嵐に、シャイナ達は巻き込まれた。

その規模は言葉でこそ最大規模と言ってしまうば終いであるが、実際その時の海は地獄絵図。嵐が発生した地域を渡航していた者たちの数多くは、故郷の大地を二度と踏む事無くこの世を去った。漏れる事無くシャイナ達もそうなりかけた。だが、ある二人を除き乗船していた者達は無事、陸の土を踏みしめる事が叶ったのだ。

だが、その結末はシャイナの心に深い傷を負わした。自分の代わりに身を投げたアイラと、それを助けるべく海に飛び込んだリック。その二人が居なくなつた事の責任を、一人で抱え込んでいた。

実際に死が確認されたわけでは無いのだが、大海原のど真ん中、しかも大嵐の中で樽一つで生きて帰れるとは、常識的に考えても無に等しい。そんな事、話せるようになったばかりの子供でも分かる

事である。

それでも、彼女は二人が生きている事を信じていた。表向きは。そうでもしないと、自分自身の気持ちを抑えきれず、内側からぼろぼろと壊れていってしまうから。

「私なんて……私なんて、忘れられてしまえばいいのに……」

彼女は何度目か分からないその呟きを暗闇の中で呟いた。

「？　？　？　？　？　？」

「ぶつはあ！　やっぱここの酒はいいね。この下にピリツとくる感じ……、正に芸術」

リーデはジョッキに入った蒸留酒を勢いよく飲んで、机に叩きつけるように置く。見た目だけの判断では、まだまだ子供に見える彼女。そんな小さな体で水のように酒を飲み干すリーデからは、男に劣らない荒っぽさを強く感じられた。

「全くだ。にしてもよくそんなに飲めるな。まだ大人にも成りきってないだろう？」

「酒の強い弱いに歳なんて関係無いでしょ。ホラ、あそこの奴なんか私より後から飲み始めてた癖に、もうぶつ倒れてるし」

確かに、三十辺りの歳だろうと思われる男が右手にジョッキを持ったまま顔を赤ワインのように真っ赤にして、机に突っ伏していた。そんな醜態を晒している男を見て、俺も酔い潰れたらあんな感じなのかと、心の片隅で少しヴェンは気にかける。

「で、いい加減教えないか？　酒が回ってからでは遅い」

と言いつつも、ラリーはジョッキの蒸留酒を喉に流し込んでいる。何だかんだ言いながら酒が好きなのか、先ほどから何杯も空にしていた。

「まったくさつきから教える教えるうるさいねスレイヤー。人が楽しく飲んでるつてのに。アンタ友達居ないでしょ？」

「知るか」

そっけない返事。興味が無いと態度で示しているようだが、内心は凶星なのかもしれない。

「まったくお前って奴は女の子を口説きながら酒を飲むつてのも出来ないのか。なあ、リーデー？」

「確かにそうね。でもヴェン、貴方口説くのヘタクソね」

「まっ、よく言われるがな。果たしてどうかな？」

リーデー・ランスリー。この酒場での会話のペースは完全に彼女の手の上である。ヴェンは彼女の事を表向きでは信用しているようなそぶりを出しているが、実際の所はかなりの警戒していた。ラリーもラリーで常に視線を彼女から離さず、腰に帯刀している片手剣に手が伸びた時にどう動くかを考えていた。

ふーん、コイツら舐めてたけど結構やるじゃん。つま、これなら大丈夫か。

リーデーはそんな事を考えながら、心の中で男という賞品を品定めをしたいた。

「そんな事どうでもいい。さっさと教えろ」

先ほどよりも苛立ちを増した声。リーデだから問題無いだけなのだが、度胸の無い人間が聞いたらこれだけでかなり臆しそうな凄みのある声と目線。そして独特の威圧感。

半分脅しと言っても問題無いだろう。無論、リーデに通用する訳は無いのだが。

「はいはい。さすがにこれ以上引つ張るのは無理か。んじゃ言うよ。あ、これ他言してもいいけどしたら危ないのアンタ達だかね」

「んな危ない事俺達に教えようってか。そんな事知ってる小娘とは、危ないじゃねーか」

「何？ 私がそこの小銭稼ぎで情報売ってる酒場の親父程度だとも思ってた？」

「いや」

それだったらいいなという願いはあったがな——という言葉が心の中でヴェンは言った。

「で、只者で無いお前は一体何を握っているんだ？」

「まあ簡単に言わせてもらうと、アンタらを殺そうとしている奴がいるって事」

「成程ねえ……」

「……」

——追いかけている。

——捕まようと。

そんな甘優しい言葉はその少女の口からは出る事無く、殺そうとしていると単刀直入。遠まわしに説明されるのは勘弁だと思っていた二人だが、こう直球で言われてしまうとさすがに驚く物はある。

「でも俺達。まあこの傭兵はどうか知らんが、命狙われるような事した覚えねえぞ？　むしろ命からがら嵐が抜けだしてきたんだ。むしろ歓迎してほしいね」

というヴェンの意見に、甘いというリーダーの声。ラリーは何も口にせず、ただ腕を組んで話をひたすら聞いている。

「その抜けたしてきちゃったのが重要。気づたでしょ？　この国以外の船がアンタ達のご立派な船だけってのは」

「まあ、そうだが……。それに何か問題でもあんのか？」

そう言い、ジョッキの酒を勢いよく喉に流し込んで、意味が分からねえと苛立った口調で言いジョッキの中身がこぼれそうな勢いでテーブルに置く。

まさか……。でも、そうだとしたら……。

その横のラリーは、自分で立てた仮説に自分で驚いていた。仮説が合っていたとすれば、かなり厄介な事に巻き込まれたに違いない、と。常に冷静な彼だが、いつのまにかその手の平には、緊張の汗が滲んでいた。

「おいランスリー。それは俺達以外の船は……」
「待つて」

ラリーの言葉を遮るように、リーダーが強い口調で待てと命じる。その鋭い剣幕と、重みのある口調から、二人は何も言わずただ静かにその命令に従った。

そしてリーダーの視線は、酒場の小さな窓を見据えていた。

「あーらら。どうやらここでもよろしくないお話をしてたのバレちゃったみたいね。兎みたいな耳でも持ってるんじゃないの？」

「バレたって……かなり厄介な事になりそうな発言だな？」

「……で、どこから逃げるんだ。どうせそれくらいは準備してるんだろう？」

ラリーが腰の剣の感触を確かめながら、リーデにそう問う。

待っていましたと言っようにニヤリと笑みを浮かべ、髪を束ねていた紐をさらにきつく縛る。

「当たり前でしょ？ さあ、楽しい宴会はこれから始まるよ」

そう言い、ジョッキの中身を全て口に流し込んだ。

2章【?】 月明かりの街

外は完全に日が落ち、街も人の流れは消え建物から漏れる優しい光がいたる所から見える時間。月明かりに照らされて街を疾走する三人が居た。

ただ、街といっても土がある通りを、では無い。だからと言って煉瓦の引きつめた道でも無い。今、三人が立っている場所は、瓦の上。街に立ち並ぶ建物の屋根の上である。

「で、どういったルートで逃げおせるのが最善なんだい？」

「まず、あんたらには可愛いお連れ様がいるでしょ？ もしこの先の危険にまで連れてくなら、まずはその子を迎えにいかなきゃならないんじゃない？」

「シャイナの事も既に把握済みか……。お前、何者なんだ？」

「んな些細な事どーでもいいでしょ？ それとも何？ ここで嘘ついてあんたらを陥れるほうがいい？」

喉で笑いながら、いたずらっぽい笑みを浮かばせるリイーデ。先ほどから幾度も目にしているその笑みだが、月夜に照らされている今のその姿は、どこか人から離れた生き物……。堕天使が嘲笑っているのかと一瞬、ラリーは錯覚した。

「……まあいい。だったら二手に分かれよう。どうせ逃げる身だ、三人じゃ目立ちすぎる。それに、素早く動けねばならなそうだしな」

そう言つてラリーが視線で下を指すと、物騒に不気味輝く鋭い鉄をと、朱色に光る松明を持った人間が四人ほど騒いでいた。

その四人達だけでは無い。今街中にはラリー達を闇に葬ろうとすべく動く輩が散っているはずだった。見つかるのも時間の問題。なら

ば、行動は少しでも早く起こさなければならぬ。

「だったら俺がシャイナを連れてくる。落ち合う場所は……」

「船よ。ヴェン、あんたの船。仕入れた情報だと完璧までとはいかないまでも、航行には問題無いほどには補修完了しれるらしいから心配せずとも大丈夫」

その返答は別の見方で内容を取れば、船でこの国を脱出するべき、という意味にもなる。

「成程な……。でも船員に連絡が取れてないぞ？」

「その点も心配ご無用。私の仲間が既に事の次第を伝えているわよ。信じてくれてれば、出港準備を始めているハズ」

「相当な根回しじゃねえか……。お前って何者——」

「お、おい！ いたぞ！ 屋根の上だ！」

結局問いただす事無く、三人は発見されてしまう。下を見ると先ほどの四人が慌てて上に登ろうとしてきれいるが、上手い手段が無いらしくおどおどとしていた。

「おっとっと、見つかったやみたいね。んじゃあ私とスレイヤーで引きつけとくから、そのうちにお嬢様を救出する王子様ごっこしてくれば？」

「反乱した国で姫と共に国を脱出か……。へっ、二流詩人が聞いてもうんざりするくらい甘い甘い物語だぜ。んじゃ、俺の船で会おう」

そう言いながら片目でウィンクし屋根を飛び降り、ヴェンは単身で姫の救出に向かう。刺客達は暗いためか一人だけが分かれた事には気づかず、ラリーとリーデを執拗に追跡し続けた。

途中、蕪矢が放たれた空気を振動させ響く高い音と、火矢の明か

りが視界に入ってきた。恐らくこれはまだ街に潜んでいるだろう仲間達に標的の発見を知らしたのだろう。

「さて、これから先がパーティーの本番ねスレイヤー。まあ、殺害者なんて、また大層な名前を掲げているんだから大丈夫だろうけど」
「一応、それなりの芸は身に付けているつもりだ。先に行く」

そう言って剣を抜くと、ラリーは先行して屋根から下の道へ颯爽と飛び降りる。直後、一人の人間の悲鳴と、肉を切り裂く鈍い音が聞こえる。何が起ったかは見なくとも分かる。

「成程。まあ、名前負けしてないといいけど」

そう小さく呟いてから、ラリーでも後を追う屋根から飛び降りると、べちゃりという濡れた感触を靴で地面を踏むと同時に感じる。特に雨が降ったわけでもないのに、目で見なくともその液体が何かは分かる。赤く、鉄の匂いがする人間の血だというのくらいは。

その横に立つのは、刃が赤黒く輝く片手剣を持ったラリー。そしてその足元には背中大きく切り口が出来倒れている男の刺客が一人。建物と建物の中から漏れる月明かりがそれを照らし、不気味に映っていた。その立ち姿は、正にスレイヤー——殺害者——そのものだっただ。

「致命傷では無いはずだが……どうだ、とどめを刺しとくべきか？」

倒れているその刺客の喉元に剣の切っ先を突き付けて、無機質な声でそう問う。

「なーんだ、殺してないんだ。名前負けしてるわね」
「知るか。で、どうする？」

「勝手にしていいわよ。スレイヤーさん」

そうか、と短く返事すると、刺客の喉元に向けていた切っ先を放し、建物の壁に刃にこびりついた血を擦りつける。そして目の前に水平に剣を持ち、汚れ具合を確認して鞘に戻す。

「無駄に殺しはしないさ」

「ふーん、結局名前負けしてる」と

「何か言ったか？」

「いや。ほら、次が来る前に行くよ」

そんな他愛もない会話を交わした後、二人は暗く細い裏通りを身をひそめながら疾走した。

途中途中数度か刺客に出くわすが、見過ごすか切り捨てるかしながら順調に港へ歩を進めていった。

「スレイヤーとか名乗ってるだけあって、意外とやるじゃない。その身のこなしは戦い慣れてる証拠。しかも魔物とのじゃない。人と人の血なまぐさい殺し合いに、ね」

「俺は一応傭兵だ。これくらい戦えなければとうに死んでるさ」

「まあ、私のほうが強いと思うけど」

「何……？」

その言葉に、ラリーは一瞬苛立ちを感じる。一応これでも自分はそれなりの実戦をこなしてきたし、戦いの腕も悪くは無いと思っている。それを女、しかもまだ少女とも呼べるような体つきの奴より劣っていると言われれば反論したくなるのも当然である。

「いやいやそんなマジになられても困るって。ちょっと言みたかっただけだっ」

「……まあいい。この先、敵多そうだな。俺達が港向かってるの気付いてるらしい」

「あいつ等もそこまでは無能じゃないか。どれどれ？」

二人が建物の角から、唯一港へ続く大通りを覗くと、何人かの人間が忙しなくうごめいていた。槍、剣を持った男達。どれも刺し向けられている刺客達だ。だが、どこか慌ててるような様子で強者には見えない。

「ひーふーみい……こりゃ十人ばかりいらっしやるようね。どうするよ、突っ込む？」

「普通に考えれば中々酷い作戦だが、こう急ぎの状況だしな。それに、あの統制の無さ。ヴェルドナがお姫様抱えて戻って来る事には、花道を用意しておくのも悪く無い」

そう言い、口元をニヤリとラリーは歪ませる。その笑みは、楽しみを示す意味の不敵な笑み。戦いをする事にどこか高揚感を覚えている、傭兵の笑みである。

「だったら奇襲で決まりね。で、どっちが斬りこむ？」

「……より強い方、だな」

「ふふっ……、了解！」

ラリーのその一言を引き金に、二人は競い合うようにして敵の群中に剣を構え走り出した。

2章【?】 月明かりの街（後書き）

「……誰!？」

何かの力によつて部屋唯一の窓が勢いよく破壊され、ガラス片と木片が室内に飛び散る。そして一人の人間が影となり侵入してくる。シャイナにとってその影はどこか、見覚えのあるような男の影だった。

「え……? 何でこんな所にいるの!？」

「そりゃーな、迎えに来たからさ」

「!?!? こ、来ないで……。私に、もう私に近づかな……。っ!?!？」

シャイナの腹に男はロッドの柄で思い切りたたきつける。シャイナは息をのんで短い悲鳴を上げた後、脱力して膝から崩れ落ちる。床に倒れる直前に、男はその小さい体を抱える様に支える。

「……悪いな。すまないが、ちょっと眠っててくれ」

そう男は、意識の無いシャイナに囁く。

男はシャイナの体をお姫様抱っこのように持ち直すと、自身が壊して侵入した窓から部屋を抜け、屋根から飛び降り、夜の街を逃げるように疾走した。

2章【?】 月光の銀浪

「……いない?」

ヴェンが宿舎に辿りつくと、借りていた個室はそれは散々な有様になっていた。

窓ガラスは何か破壊され、ガラス片がキラキラと室内の床を宝石のそうに輝いている。部屋に唯一の椅子は倒れており、一瞬見ただけでもシャイナの身に何かあったのかは推測する事ができた。

「おい、シャイナ。どこにいるんだ、シャイナ!」

暗く荒れている部屋の中心で、叫ぶようにヴェンはその名前を呼ぶ。勿論、返事は帰ってくる事無く帰ってくるのは海から吹きこむ潮の匂いがした風。部屋は静寂に包まれていた

ヴェンはその返事が無い事に苛立ちを感じ、自身の手に爪が食い込む力で拳を作りその感情を部屋の壁に思いっきり叩きつける。ほとんど無意識に。

「……くそ、俺が動揺してどんすんだよ」

冷静になれ。まず状況を整理しろ。

ヴェンはそう、自分に言い聞かせる。

まず、どう考えてもシャイナが一人で出ていったという可能性は考えられなかった。この部屋の状況から見て普通はそう考えないだろう。

となれば、拉致されたとなる。そして一番拉致をした可能性のあるのは、先ほどからヴェン達を追っている刺客達の仲間と推測され

た。単純に金目的か何かの人質か、それもと命を絶つたためか。どっちかは誰にも分からないのだが。

ヴェンの推理はこうだった。……と、よく考えたような言葉を使ったとて、こんな事誰でも瞬時に察せられる事なのだが。

「ん？ これは……」

そんな憶測を考えながら部屋をぐるぐる歩き回っていると、ガラス片に混じって一つ、紫色の宝石が光っている事に気づく。近づいて拾ってみると、それは地味な、けれど美しいイヤリングだった。

それを見たヴェンは、ある記憶が脳内に思い浮かんだ。このイヤリングを付けている魔法使い見習いの少女の姿が。

「シャイナの……イヤリングだよな？」

ヴェンが拾ったそのピアスは、紫色に光り輝く。だが、他の光が当たってキラキラと輝くのではなく、その宝石自身が自ら光り輝いているのだ。まるで生きているかのように。

そして何かがヴェンの脳内を走る。言葉に表せない、邪魔くさいというか、何かに呼ばれているというか、そんな言い方がまだ近いにはないかと思う。その違和感はどこか、ある地点に自分を促しているかのようにヴェンは感じた。

それがイヤリングに付いている宝石——霊石——同士が引きあうという性質上の働きだとは、ヴェンは知る由も無い。

「あてもねえしな……。ここは自分を信じるか」

ヴェンはイヤリングを自分の拳で強く握り締め、窓から地面に降り再び夜の街中を疾走した。

「？　？　？　？　？　？」

「こいつ……ば、化け物か……？」

「お、臆するんじゃない！　所詮にんげ……ぐっ！！」

「ほくら、ビビってる暇あったら少しでも武器振ったら？」

月の下の港町で一人の刺客が銀色の刃に斬り裂かれ、真紅の血を吐き出しながら地面に転がる。今更の話では無い。既に彼女はいくつもの生物をこう傷つけてきた。この人間はまだ重症で済んでいたが、同情の心からでは無い。命を奪うまでも無いと判断されただけの事だった。

「……強い」

隣で剣を振るう銀髪の少女に対しての率直な感想。そう、女性であり、まだ少女と呼べるはずの体格に見合わず、とにかく強いのだ。槍と剣で武装した適刺客三人に対して、片手剣一本と自らの腕で全て対応している。それもなんとか戦っているのでは無く、むしろ余裕すら感じられる戦い方。

剣を振るう度、三つ編みの銀髪と真紅の血が宙に舞う。月光に照らされたその姿は絵に描かれるような、神話に登場する美しい銀狼のようだった。

「……つつ！」

ラリーの頬を、刺客が突いた槍の切っ先が掠める。もう少しずれていれば顔を大きく斬られていたかもしれないが、このくらいの事で冷静さを欠くラリーではなかった。次の攻撃に備え神経を戦闘に集中させる。

正面の刺客は先ほどの攻撃でこちらに比があると思っ込んだのか、

もう一度槍をラリーに突く。だが、その攻撃は完全に見切られ柄の部分空いた左手で思いつき掴まれる。

「槍の使い方がなっていないな」

「!？」

それを振り払おうと刺客は力任せに槍を引こうとするが、既に時遅し。ラリーは出来た隙を逃さず懐に潜り込み、片手剣を切り上げる。瞬間、刺客は小さく声を上げて膝を折り、地面に倒れる。

だがヴェンが剣を斬り上げた上げた矢先、別の刺客の剣でそれが叩き落とされる。

「こっちは大したこと無いな。くたばれ！」

「甘いな」

ラリーは追撃で振り下ろされた剣に対して、先ほど倒した刺客が持っていた槍の柄でその刃を受ける。金属と金属がぶつかり合い、つば競り合いの状況になる。だが、刺客は剣を振り下ろしているに對して、ラリーは完全に受けの状態。体重を全力でかけられる刺客のほうに分はある。

「ちっ。だが、いつまで耐えられる？」

「戦場で口数は……」

「何を言っ……っつ！」

ラリーは刺客が上から一気に体重をかけてくるタイミングを見計らい、一気に自身の重心を右に逸らす。バランスを崩された刺客は、致命傷とも言える隙を露にしまう。

ラリーはその隙を衝き、長い槍で刺客を足払いする。見事に尻餅を着いた時には既に勝負は決まっていた。ラリーは金属製の槍で刺

客の頭部を強打し、一撃で昏倒させる。

「少なくともすべきだな。その一瞬の余裕で死ぬ」

倒れた相手に槍を向け、見下すように言う。それには傭兵としての貫禄が少しばかりあるのだった。

更に一人の刺客が仲間の仇打ちのように槍を持ってラリーに突きかかるが、余裕と言わんばかりに軽く槍でラリーはあしらひ、あつけなく一突きされて地面に倒れた。

「これで全滅つと。にしてもスレイヤー、槍のほうが使つの上手そうじゃない」

「どうだろうな」

仕事を終えたのか、リイーデが片手剣をクルクルと回し遊びながら陽気にラリーに話しかける。見渡すと確かに六人が地面に倒れ、大通りで待ち伏せをしていた刺客達は全滅していた。だがどれも気絶や重症だけで命まで奪われた者は皆無。

「これくらいは余裕でしょ？ スレイヤー」

傷はおろか疲労さえ全く見せない少女に、ラリーは心中驚きを感じる。あまり強敵では無いといい、一人で三人を相手したのだ。少しの疲労くらい見せてもらわないとラリーとしては、戦場で生きる事を糧としている傭兵としての立場が危うくなる。

「まあな」

「もしかして本気出しちゃったりしてるわけ？」

「どうだろうな。お前はどなんだ？」

「私？ 私は全然出して無いけど」

そう言って手遊びしていた片手剣を、二つある腰の鞘の内の一つに返す。

「にしても頬随分赤いわね、大丈夫なわけ？」

「ん……？ ああ、少し切ったみたいだが問題無いだろ」

「えー、かなり見た目に問題あるじゃん」

「どうだかな」

リイーデが意外なほど頬に注目するので、ラリーは自分の怪我を手で触って再確認をする。実際痛みはほとんどないのだが、顔面のためか予想外に出血だけはしていた。とりあえずの処置で、自身の服の袖でラリーは血を拭う。だが、すぐ新たに頬に温かい液体が走る。

「血、止まらないみたいね。しょーがない、これあげる」

リイーデは腰に付けている小物入れから布切れを取り出し、ラリーに投げつける。

「止血布か……。貰っておこう」

「ったく愛想が無いわね。まあいいや、さっさと行くわよ。おかわり貰いたい気分でも、本気出したい気分でもないし」

リイーデはそっけなくそう言うと、港に向かう大通りを軽い足取りで走り始めた。刺客に追われてる状況のはずなのだが、どうもその後ろ姿が楽しげに買い物をする少女のようにラリーは見えた。

「幸せな奴だな……」

そう愚痴をこぼし、ラリーは見た目以上に速く走る少女の背中を、先ほど落とした自分の剣を回収しつつ追いかけた。

その時の背中銀色の三つ網みが妙に美しく、ラリーの目には映ったのだった。

2章【?】 捜し物

「あと少しか。こつもあつさり行くとは思つてな……っ!？」

シャイナをさらつた男に、鋭く光るナイフが風を切つて襲いかかる。左頬の辺りのローブは裂け、後寸分位置がずれていたら顔に大きな切り傷が出来た軌道。それは前方のある人間の手から投げられたものだ、すぐに確信する。

「悪いが、捜し物をしていてな。ちよつとばかり協力していただきたいんだが」

ヴェンが建物の角から姿を現すと同時にそつ、役人のようにゆつたりとした口調で告げる。右手はしっかりと、腰のダガーの下に当てられている。

「そういう事ならば、喜んでご協力しよう。因みに、捜し物とは？」

「見習い魔法使いの少女。調度一人分」

「おお奇遇だ。私もつい先程までそれを捜していたね。今は見つかつて、実にほつとしというよ」

「そうか。なら、そちらの見つけたのは間違つてるな。今貴様の汚れた手で持つてんのは……」

中途半端に途中まで告げると、ヴェンはダガーを引き抜き接近を試みる。男は機敏にバックステップをし、間合いを取る。ロッドは勿論、ヴェンに向けて構えられている。

「悪いがな、それは俺のもんだ。ご返却願おう」

睨みつける目線と、凄味のある低い声。ローブの男はそれに対し、返答の代わりに向き出た敵意をぶつける。

「そりゃー無理な相談だな。悪いが、さっさと消えてくれないか？」
「だったら消してみろよ。それくらい、魔法使いなら簡単だろ？」

ヴェンは挑発的な態度で笑いながら、男を罵る。その挑発に乗ったのか、それとも言ってしまうもないだけか。男のロッドの黒い零石が、重い色の光を放ち始める。

「話し合いで解決は無理と見た。いいだろう。食らえ、ドウンケル！」

瞬間、男のロッドがより一層強く輝いたかと思うと、ローブ男はそれを振りかざす。次の瞬間には、ヴェンに向けて一つの黒弾が放たれていた。右にサイドステップしそれをなんとか避ける。そしてヴェンが立っていたはずの場所は、土に穴が空き、黒ずんでいた。だが、掘られたはずの土はどこにもない。存在自体が無くなったかのように穴が空いていた。

「まったく危ない真似してくれんな。当たたらヤバいじゃねえか」
「避けたか。雑魚はこれで片付くんだが。だが、何発まで持つかかな？」

二発目、三発目と、黒弾が次々に放たれる。ヴェンはそれを右、左と、一手一手を慎重に見切り避けてゆく。そして五発目をバックステップで避けた時、一瞬ローブ男の動きが止まる。その瞬間を見逃さなかった。

「悪いが、雑魚やってたのは昔の話でね。今はどっちかって言うと

使えるほうになってるんでね！」

ヴェンは先ほどの問いに、遅れて返す形でそう言うと、一気に飛ばようにローブ男の目の前に踊り出だ。ナイフのある右手を横から振りかぶり、斬りかかる。だがロッドに防がれ、攻撃は阻まれる。

「防ぐか。だが、接近した時点で俺の勝ちだな」

「ふっ……まだ分からないぞ？」

ただでさえ接近戦に弱い魔法使いが、動きの素早いダガーを相手にし、その上片手には人間一人を抱えている。勝敗は歴然。一刺しをダガーで打ち込めば、決着はつく。

ダガーの連撃。なんとか防ぎきるも、ヴェンの四撃目にローブ男は大きく体制を崩される。

「とどめだ！」

ダガーを振るう。直撃のラインの軌道。この攻撃が男の腹に刺さり、倒れればシャイナを取り返せる。簡単な事だ。だが、ヴェンは自身の手がそれを行う直前で、その振りを静止させる。いや、させるといふよりは、無意識だったのかもしれない。

「や……めて。もう、誰も……死な……で」

「シャイナ……？」

ローブ男が左に抱えているシャイナが、消え入るような声を絞るように言う。だが、ヴェンにはその少女の言葉が叫んでるように、はつきりと耳に聞こえた。

「ほう、成程な……ウィンド！」

「うおっ!？」

ヴェンの動きが止まった所に、ローブ男が風の魔法を放つ。突風が吹き、ヴェンはそれを全身に受け、引きずられるように後ろに押し戻される。すぐに体制を取り戻し、もう一度最接近を試みようとする、何故かローブ男はシャイナを地面に下ろしており、戦意を失っていた。

「しょうがねえが、今回は引き下がってやるぜ。とりあえずは預けておいてやる」

「そりゃーありがたい話だが。さっきまでの威勢はどこいった？」

「まあ気分って奴だ。ただ、いずれ取り返しに来るからな」

そう告げると、男はローブを翻しながらヴェンに背を向け、その場から身を引く。ヴェンはその背中に向けて、最後に一言だけ告げる。

「シャイナは俺のもんだ。お前なんぞには渡さねえ」

「……ふん」

男は一瞬ヴェン振り向いて、ローブの中で口元を歪めて笑うと、闇夜に包まれた街に消えていった。

「さてさて……。シャイナ、大丈夫か？」

地面に横たわるシャイナの上半身だけ起こして、顔を覗き込むようにして話し掛ける。顔は疲れていて、心が沈んでいた。

「もう……放っておいてよ」

「それは無理な相談だ。俺は、お前がどうしようが、絶対に連れて

く」

強い眼差しを向け、右手を差し出して言った。シャイナはそれを聞き、少し笑らう。

「……分かったよ。何言っても、ヴェンはそう言っただけでしょ？」
「多分な。ホラ、立てよ。時間が無い」

ヴェンの差し出した右手を掴んで、シャイナは立ちあがる。ヴェンは少しだけシャイナを見て笑うと、その手を引いて、月明かりに照らされた街を走り始めた。

2章【?】 船出

「……来たぞ」

「思ってたより遅いわね。何して遊んでたのかしら」

ミストラルが停泊している港に、ヴェンと、その彼の手を引かれたシャイナが姿を見せる。先に刺客達をあしらひ辿りついていた傭兵と狼は、月に照らされた樽の上でその安い物語の逃避行のような姿を眺めていた。

「ヴェルドナ、残念ながら飯は終わったぞ。残念ながらお零れは無しだ」

息を切らして辿りついたヴェンに対しての、ラリーの第一声がこれ。何とも緊張感のない言葉だが、逆を言えばこの状況でも余裕を持っているという事である。

「そんなのいらんね。こっちはこっちで済ましてきた。それこそ、お腹いっぱい……な」

と言って、大きくため息。その息には色々と複雑な事情が混じっているのは、体験した本人以外には分からないだろう。

「ふーん。で、そっちの子がシャイナって子ね。随分と疲れてるっぽいけど、まだ動くわよ?」

「分かって……る。でも、ちょっと……休ませて。脇腹が……」

膝に手を付いてせえせえと荒く肩で息をする。魔法使いと言えど、特に体力が増えるわけでもなく、並の女の子のシャイナに大の大人

の男に手を引かれ、それなりの距離を走ればこうなるのは当たり前である。

「まあ随分と走ってたしみいだしね。でも、もうちょいでゆっくり出来るわよ」

「したい物だな。ヴェルドナ、お前の船で逃げるぞ」

ラリーが指差す先には、既に帆を開き、錨いかりを上げている最中のミストラルがある。今乗船すればいつでも動き始められるような状態。

「まったく俺の船だぞ。勝手に使いやがって……傭兵ってのは普通、雇い主に忠実なもんだろ？」

「船に乗せてもらったあの時からそのつもりだが。さて狼、お前はどつするんだ？」

リーデに向けてラリーは、狼と称し問いかける。勿論帰ってくるのは答えではなく、コイツは何を言っているのという非難の表情と、呆れ気味の声。

「おおかみ……？ それ、私の事？」

「戦ってる時の姿が狼みたいだったからな。それに、平常時も似てるからな」

傭兵が洒落や罵りを言う時は、鼻で笑いながら口元をニヤリとする。しきたりのような物なのである。この顔で何か言われると頭にくるという話は有名だが、これも例外なくそうであった。ラリーは傭兵の鏡かのように、そのしきたりを貫いて言い放った。

「……ふーん。まあ、いいわ。それで呼んでも」

「……は？」

だが、帰って来た返事は予想外の物。それに、今度はラリーのほうが目も呆れてしまう。それもそうだ。普通、狼なんと言われてその呼び名を呑みこむ女の子なんて存在する物だろうか。怒るか開き直るかくらいの反応はするものだ。そう思ってからかった傭兵は、想定外の反応に驚いていた。まったく持って行動が読めない、と。

「よし、俺の船に乗るか。どうせあの連中共がまた追ってくるんだろっ?」

「まあそうね。中々粘着質だと思うわよ、あいつ等」

ラリーが一人立ち尽くしている間に、ヴェンとリーデは先にミストラルのほうに向かって動き始めていた。その背中を見て暫く考えていると、ラリーの隣に自身より2回りほど小さい少女が、ロッドを杖にして立っていた。先ほどとは違い息が整っており、ロッドに体重をかけている以外は平常時となんの変わらない姿。だが、顔はどこかつまらなそうにしていた。

「ねえ、いいの?」

「何がだ」

シャイナの主語の無い問い。少し悪戯っぽい口調であつた魔法使い見習いのそれは少し可愛らしくも感じるはずなのだが、ラリーは特に反応を示さない。

「えーと、名前は分からないけど。あの子、取られちゃうよ?」

「生意気な狼を手懐けるのは、海の上に浮かんでる船乗り風情では無理だ」

「おお……かみ?」

すました顔でラリーはそう言うと、シャイナは可愛げに首を傾けて、傭兵の意味の分からない言葉の意味を考えていた。同時に、傭兵というのはいいい意味でも悪い意味でも、やはりどこか外れているとも思っていた。

「何でもない。行くぞ」

「あ、ちよつと待って！ まだ足が上手く動かないんだってば」

全員が船に乗船すると、一人の船乗りの声がそれを迎える。この危機的状況であつても手早く仕事をこなし、自身の調子も全く崩さないそして。妙に興奮する事もなく、焦る事もない。彼の存在こそが、この船を動かしていると言つても過言ではないかもしれない。船長を差し置いて。

「船長遅刻ですよ。おかげで航海予定に見直しが必要じゃないですか」

「ったく、どいつもこいつも何なんだよ……。俺だって苦労してんだぞ」

からかうように嫌味を言うワンドに対し、頭を抱えて自分の頑張りを訴えるヴェン。事実シャイナを誘拐した魔法使いらしき男を追いかけて、中々激しい勝負をしていたのだが。

「ともかく、出港準備は整ってます。後は船長の唯一の見せ場のみです」

「唯一かはともかくとして……分かったぜ」

ヴェンはワンドからの報告を聞き終えると、改めて船に乗る個性豊かな面々を見る。全員がヴェンのそれに対し、一つ頷いて意思表示を見せる。

「おい、あいつらを出港させるな！ この国から出すんじゃない！」

その時、港の通りから何人かの慌ただしい刺客が松明と武器を持って、ミストラルに向かって来ていた。どの顔も殺気立つ、というよりかは焦っているようである。

「あーら、まずそうなおかわりが来ちゃったわね。どうするスレイヤー、全員捌くつてのも面白いかもよ？」

「面倒だな。それとも、狼はまだ腹が鳴ってるのか」

「まあそうと言えばそうだけど、私質にはこだわるから」

「成程、同感だ」

刺客達は急ぎ忙しと港の棧橋に群がるが、ある一言が聞こえたと思うと次の瞬間にはその半分が海の中に憐れな姿で転落していた。見れば棧橋の表面は木のざらざらとした手触りでは無く、つるつるとした氷に覆われていた。

「じゃあ、残飯は処理しないとね」

その姿を、魔法使いの少女は小さく顔を笑わせながら見下ろしていた。

そして残るは、船を出港させるだけとなる。それを行うにはまだ一つだけ、やるべきことがあった。ヴェンは右足を樽にかけ、いつものように格好つけ叫ぶ。

「よし、ミストラル出港するぜ！」

そうしてミストラルはゆっくりとその大きな体を、水平線に半分日が顔を出した大海原に向けて動き始めた。

2章【??】 理由

「だーから、何でお前が乗ってるかって聞いてんだよ!」

船室にヴェンの怒鳴り声と握り拳をテーブルに叩き付ける音が大きく響く。だがそれで空気が凍りつく事も、熱くなる事も無い。各々、それなりに卓を囲んで楽しんでいるわけである。

レスターから出港し、周りに見える景色全てが水平線になった頃。ヴェンの提案により、一度自分達が今どんな状況になっているかを確認し合おうという話になった。

そしてまず最初に浮き出てきたのが、リーデが船にいる事。一緒に旅をするどころか、そう親密な関係でも無い少女がいつのまにか潜り込んでいた。よくよく考えればかなりありえない状況なのが、あまりに溶け込み過ぎて誰も気にしていなかったのである。

「だって着いていったら面白そうだったし、別にいいじゃん」

リーデは肘を付いて眠そうにしながら、ヴェンの質問に流すように答える。視線は一応ヴェンにむいてはいるのだが、目力が皆無である。もやは興味というのを示していなかった。

「面白いなんかで普通国を出るまでの?」

「さあね。でもレスターにいても追っかけられるだけだし、別にトチ狂った行動ではないと思うけどねー」

「追っかけられるって、あの襲ってきた人達?」

「そうそう」

興味どころか、シャイナと女の子同士、仲良く話している始末で

ある。

狼の足の速さに、人は追いつくことは出来ないのだ。

「おいラリー。俺の立場ってどうだと思っよ？」

ヴェンは愚痴るようにして、腕を組んで前にの席に座るラリーに問いかける。返答はすぐに帰ってきたのだが、ヴェンが期待しているような返答では勿論無かった。

「低いな」

目も合わせず簡潔にラリーは冷たく低い声で言う。要は、どうでもいいから黙ってくれ——という訳だ。

「へっ、聞いた俺が悪かったよっ！」

そう言いヴェンは舌打ちを一度鳴らし、ジョッキに入っているビールを一気に喉に流し込む。結局は、これが一番効率的かつ、合理的はストレスの発散方法という事なのである。

金は無駄に無くなっていくのだが。

「で、その襲ってきた奴らは何者なんだ？ いい加減教える」

「あーそういえばまだ教えてなかったっけか」

ラリーは顔をリーデのほうに向けると、真剣な目で睨むようにして質問する。リーデもいい加減話の切り替えはするらしく、そこそこ真面目な顔になってから口を開く。だが、相変わらず鼻で笑いながら上からの視線ではあるのだが。

「散々じらしていたのはお前だろ」

「まーそうだけどね。んじゃあ仕方ない、教えてあげよつか」
「当たり前だ」

そもそもヴェン達がレスターから逃げるようにして出港する事になったと言え、正体不明の奴らに追いかけて回されたからである。それも、子供がするような鬼ごっこというわけにはいかない。生死を賭けた命のギャンブル。そんな事になるに至った原因が、今リーダーの口から語られようとしてた。

「信じるか信じないかは別だけど、まあ話すとしますか」
「既に信じられねえような事ばっか起きてんだ。今更何を言われても変わらねえよ」

あらそう、と不敵な笑みを浮かべてリーダーは言ってから、咳払いを一つし本題に入る。その第一世からして、かなりぶっ飛んだ物だったのは言うまでもないであろう。

「あの襲ってきた奴らは、レスター軍。分かる？ 軍隊よ軍隊。それも正規兵」

「嘘言うなホラ吹き情報小娘め」

「ふん」

即答で否定の声が、ヴェンより上がった。瞬間、腰に付けている片手剣を目にも止まらぬ速さでリーダー抜き、笑みを浮かべて投擲する。それはヴェンの座っている場所目掛けて飛び、目の前の机の表面に突き刺さる。握り拳一個分奥に飛べば、ヴェンの肉を貫き真っ赤な液体が飛び散っていた、という所である。

「でも理由がなきゃ、軍隊がそんな事はしないでしょ？」
「まあ確かにそうね。でも、ちゃんと理由はあるってわけだから、

こうなるわけよ。ほら、こないだすつごい嵐があつたでしょ？ そんな時、レスターの港に辿りついた他国船はこの船だけだったの気付いた？　これが、あの連中に追っかけたれた理由」

そして最後にラリーに試すような目線をリーデは送る。言葉こそないが、これはれつきとした物の伝え方である。ラリーもその目線だけで言いたい事が分かってしまふ辺り、こういう生臭い会話に慣れているのが窺える。

——つまりは、それが国の意向、つて事が……

正規軍が動くという事は、ほぼ間違いなくそういう事でもある。そして別の見方をすれば、レスターという国が、不穏な動きを見せているという事である。

因みに、先ほどからヴェンの身に起こった事に関しての意見は皆無である。

「じゃあ何で俺の船がここにたどり着いたからって狙われなきゃいけないんだ？　こっちは命辛々抜けだしてきたんだぞ。何かこの国に辿りついて、厄介な事でもあるのか？」

こんな話を聞けば、誰もが思うのである疑問。当たり前だ、この話には情報が足りなさすぎるのだ。

まず、何故レスターに辿りついた他国船がヴェン達だけなのか。確かに激しい嵐ではあったのだが、一隻しか無事でないというのはあまりにも偶然すぎる。運が悪かったと言えばそれで終わる事だが、何十隻もの船が海に沈むというのは確率的にあり得ない事に等しい。非力ながらも、人は自然に抗おうと最善を尽くしているのだから。

次に、辿りついたからと言って国から狙われる理由。これが分かなければ話の本筋が見えてこない。理由という物は常に物事にまわり付く物であって、人が何かをする原動でもあるのだ。

そして後一つ。追われた事に直接的に問題は無いが、観点を変えればとてつもなく重要な事があった。それは理由によっては簡単に片づけられる物でもあり、場合によっては一番難しい問題でもある。

「んじゃ逆に質問してみようか。何でだと思う？」

リーデは腕を組みながら、まるで謎かけをする詩人のようにしてその返答を三人から待つ。最初に答えたのは、最年少であるシャイナ。だが幼い彼女だからこそ、ありえそうでもっともな理由を思いつく物である。単純な考えは、時にいい方向へと導く。

「ヴェンが密輸でもしてたんじゃないの？」

と、シャイナがいたずらっぽい声でいう。それにラリーは鼻で小さく、リーデは子供のように楽しそうに、二人は笑った。ヴェンは一人でやれやれといった風だったが。

「成程。なら、今樽に縛り付けてレスターのほうに流せばいいな」
「酒樽ならありそうね。どうせ飲みまくってんでしょ？」

お決まりのような流れだが、人数が増えようと減ろうとも例外なくこうなるのはこの集団に属するために、持っていなければならぬ最低限の能力だからかもしれない。

そもそも、これが出来る人間しか寄ってこないだけなのかもしれないが。

「待て待て。確かに時々ヤバい物を運ぶ時はあるが、法律はギリギリで守ってるからな。それに、そんな事するのは年に数回あるか無いかだ。基本はただの荷物運びだぜ？」

勿論ヴェンは多少の肯定を除いて、大まかな部分を否定する。当たり前だが他の面々も本気でそう思っているわけでは無いので、この意見はすぐに流れる。

そして次に口を開いたのは、最年長だと思われるヴェン。若者と中年の間というまだ長い経験という程生きてはいないが、何年もの船旅で得た知識から導かれる理由は様々な観点から考察された物なのであろう。

「全ての船に沈んでもらわなきゃいけなかったから……ってのはどうだ？」

それを聞いたリーデの表情が変わる。だが、まだ正解という訳では無いようで口元をニヤニヤさせながらそれに採点する。

「七十点って所ね。合ってはいるけど、重要な所が欠けてるし」

「それって、何で沈んでもらわなきゃいけないか……よね？」

「まあ俺もその仮説は浮かんだったちゃ浮かんだったが。そこは傭兵さんに答えてもらおうぜ」

お前なら分かるだろう？　と言わんばかりに目配せをラリーに送るヴェン。腕を組んで座っているその傭兵は、何かしら思い浮かんだ表情にはなっていた。歳はまだ若者と言えるほどだが、傭兵として営んできた経験はあらゆる情勢を把握し、冷静に物事を判断出来る。そんなラリーが出した意見は、もし事実ならばヴェン達はとんでもない事に巻き込まれた事になるような物。

「レスターは外国船を自らの港に入れる前に、深海の底に葬りたかった……からか」

つまりは、レスターは嵐の慌ただしさに紛れて自分の国に向かう船を全て撃沈したかった。という仮説である。ヴェン達はこの騒動の中で運よく海の藻屑となる事を避けられ、たまたまレスターに辿り着いてしまったため狙われた。そういう事を意味していた。

「まあ九十点。ほとんど合ってるけど、これだけだとまだ肝心な所が分かって無いってね。因みにそれは――」

「何で葬りたかったか……だな」

「ご名答ね、密輸犯さん」

「そらーどーも」

国が軍を使って他国船を潰したかった理由。そこまでの事を国がそう簡単にするわけがない。今はまだ知れ渡っていないが、もしも撃沈された船の事が他国の耳に入ればどうなるだろう。人という生き物は、剣には槍を、牙には角を、死には報いを求めるのだ。

「それが本当だとすれば……いや、まさか。そんな事は起こりえる物なのか？」

ラリーが珍しく、焦りが混じった声で自問自答する。答えは否定。否定の理由としては、事実ならばとんでもない事が起こりえてしまうからである。

「言ってみてよ？ まだアンタ達のは正解までは辿りついてないし」

意地でも自分の口からは言わずに、どうしても誰かに言わせたい

のか。ラリーの口が動くのを、リイーデは子供のような目線で、じらすように待っている。ヴェンとシャイナも同じく、彼の口が動くのを待っていた。自分ではあまり口に出したくないのだ。

妙な緊張感が、卓を中心に広がっていた。

そして数秒経った後に、ラリーはゆっくりと言葉を選ぶようにこ
う言った。

「……戦争、か？」

「残念ながら、九九点」

即答されてしまう。

まだ足りない要素があるという事に、ラリーは驚きを隠せない。
これ以上の何かなど存在しない程の事を言ったにもかかわらず、何
かが足りないというリイーデは言うのだ。

「じゃあ何なんだ、その欠けている一点は」

だから、こうして聞く事しかラリーには残されてなかった。

結局、この論議の結論を言えるのは、事実を知るリイーデだけな
のだ。まだ少女の身体つきだが、彼女の存在感は身体とは違って強
大な物なのである。その小さな身体の中には、傭兵や船乗りも知ら
ない、何かを持っているのだから。

人の価値観は、見た目では決まるものという訳にはいかなかった。

「戦争は戦争でも、起こるのはそんな言葉じゃー表わせない」

リイーデはそう言って、一拍間を空ける。じらしているのか、自
分でもそれを口に出すのは気が引けるのか、それともこの間で起こ
る三人の反応を面白がっているのか。

シャイナは不安そうな顔で、行く末を見守る。

ヴェンは神妙な顔つきで、黙っている。

ラリーは腕を組み、作っただけの無表情のまま、その言葉に耳を傾ける。

そして狼は、軽くも重要な事は決して漏らさないその狡猾な口を、ゆっくりと開いた。

「世界中が巻き込まれる戦争が始まるのよ」

瞬間、世界が凍りついたかのように冷たい空気が卓を覆いこんだ。

2章【??】 理由（後書き）

？、？と来れば13なんですが、13って変換無かったっけそういえば…

仕方なしに？（10）と？（3）でやったらデカくなってしまった…

3章【？】 高地草

「うう……寒い。上着作つといて正確だったな」

「確かに。にしても、本当に方向こつちでいいんでしょうね？」

季節的にはそろそろ暖かくなってきたもいい頃だが、未だなお肌寒さが残る山中。天を目指しているかのように高く伸びた木々がすくすくと生い茂っていた森は一週間前程には姿を消し、今周りには高高度の厳しい環境で生きる事に適用した、背が低く奇形な形の植物ばかりが見えていた。

「何回も言うなつての。大丈夫だ。俺の記憶と方向感覚が正しければ、この山を越えた先にブリドアがある……」

と思う。という、発言するとかかなり問題になるであろう言葉は、呑み込んで心の中に鍵をして閉まっておくのが最善だと判断する。

「全つつつつつ然信用出来ないんだけど」

言わなかった所で、アイラが思うリックの価値観は変わらないのだが。

リックとしては情けない限りなのだが、男という立場にいるに關わらず特に頼りがいがあるというわけでもなく、どちらかというと主導権は常にアイラに握られているのが現状。魔物を倒すにしろ、限られた食材の中で調理をするにしろ、暇つぶしの遊びを考えるにしろ、アイラとの能力差は多く見積もって五分五分。アイラに勝つた……というか、役に立っているといえば、魔法の回復技法の発達で肩身が薄くなりつつある薬草等での治療の知識だろうか。それが無ければ、アイラの体調も今ほど回復はしていなかっただろう事は

認めざるをえない。

「適当に歩くよりかマシだったの」

「まあ確かにねえ……」

という会話を二人するのも一体何度目なのだろうか。三日に一回はしているのだから、ゆうに十回は越えているのだろう。

二人が向かっているはずのブリドア帝国。凍えるように冷たく、大陸に北側に国土に構え、世界最大の領地を持つ巨大な帝国制国家。何百年と続く歴史の深い国であり、その背景には常に軍事力の高さが付き纏っている。領地が世界最大ならば、その国力も故に世界最強。優秀な将軍に、訓練された屈強な兵士。過去の大きな大戦の記録には十中八九、ブリドアという国名が欠かさず記載されていた。

長く続く弱肉強食の歴史の中で、常に強大な力を示し続けている国。それが北の大帝国、ブリドアなのだ。

「それにしても、いくら歩いて山、山、山！ しかも魔物にあきたらず、植物まで気味悪いのばっかだし……。いままでの勘定に入れても、かなり衝撃的な旅ね。全く……」

「せめて食べ物だけでもマシになってくんねえかな。不味いつてわけじゃないが、この味は何とも……」

そう言っただけはポケットに突っ込んであった、魔物の肉を干した物を口に放り込む。出所は4日に一度ほどのペースで遭遇する、大きい牙を持った兎のような魔物。

妙に硬いわりに噛んでも噛んでも美味しく表現出来ない甘さが口に広がる、という代物だ。どうやったらこんな味が出てくるのかと不思議に思う。ちゃんと人里に戻って調理すれば、意外と美味しい料理に変貌するかもしれないと、食べる度に思ったりするのだった。

「一応私も食に関しては、色々工夫はしてみてるけどねえ。あのちんちくりんな草を調味料で使ってみたりとか、クルクルしてる木に生ってる実をすり潰してぶち込んでみたりとか」

「……何だって？」

何の調子の変化も無く言ったアイラのその言葉に、リックが眉をひそめる。そんな物を入れてるなど初耳だ。それも今上げた物は、全て怪しいからと言って避けていた物ばかり。

「おい、もしかしてそれ、俺食ってるか？」

「何？ 当たり前じゃない。私は食べて無いけど」

すまし顔でアイラは言うが、リックにとってこれはかなり重大問題である。早い話、得体をしれない物を食い物に盛られてたという事なのだ。一步間違えれば、毒殺とそう変わらない。ここには食べただけで有に一日はもたえ苦しむだろうという代物から、気付いたら命が無くなっているという物まで、色々な危険物が存在しているのだから。

「それ、食えるのか確認したのか……？」

「したわよ、一応。変な虫がそれ食ってるから大丈夫かなーって」

「得体の知れない物を得体の知れない虫が食ってるのなんて信用できるか！」

そう言っただけでリックは足元の植物に張り付いてる蜘蛛なんだか蜂なんだか魔物なんだか分からない、虫のような生物にやつあたりし、蹴り飛ばす。だがアイラは動じる事は無く、その食材の安全性について再び語り始める。

「信用出来るわけじゃない。だからリックで毒味したんだけど」

コロツと末恐ろしい事をする女だと、リックは心内で叫んでいた。勿論、その件に関しては糾弾するのだが、アイラは全く動じず、むしろ自身気なのである。

ペースは完全に、アイラの物。

「あー成程。毒味は大事だ……って、お前は俺を殺す気か！」

「別に殺そうとまで思っただけだよ。おかげで料理のレパートリーが増えたんだから、別にいいじゃない。ねえ？」

「その“ねえ”はなんだねえは。もしかして、こないだ俺が腹壊したのそのせいじゃねえのか？」

「こないだって、いつよ？」

リックは腕を組んで唸るようにして、あまり思い出したくないその記憶の棚を一つ一つ空けるようにして、引きだしの中身を探る。該当する記憶が思い出せたのか、腕を解いて手をくくると回し、その物の形を模しながら説明する。

「なんだったっけか……。ホラ、あの真っ赤でグルグルしてるアレを焼いた奴。あれ食った時」

「ああ。あの時はちんちくりん草だったわね。いつやーあの少量であの威力とわねえ……。少なめにしといてよかったわ。感謝してね」

「ああ、助かったぜ……。って、よくねえよ！　なんだよ、お前は俺に何か恨みでもあんのか！？」

「別に」

こんな風に騒ぎながら歩く事も、今までに幾度となくあった。最初は不安と焦り、時には恐怖を。そんな負の感情しか生まれなかったこの地だが、どんな環境でもそれなりの時を過ごせば人は適応す

るのだ。そのせいか、今の二人には遭難というより、ただあてもなく旅をしているという言葉の方がよく似合うようだった。

「まったく、何でこんな奴助けるために命張ったんだか……」

「何か言った？」

リックが一人言で愚痴を漏らすと、笑顔で顔を覗きこんでくるアイラ。あまり反抗すると後が面倒そうなので、リックは「特に申ししておりません」と、執事のような気取った口調で答えておく。

その後は特に話す話題も無く、二人ほとんど無言のまま山を歩く。別に気まずくなくなったわけでも、どちらかが機嫌を悪くしているわけでもない。これが山を歩いている時の平常状態であり、続いている遭難生活の普通なのだ。

無言でひたすら歩く事は悪い事では無い。話さなくともそれなりに意思疎通出来るからこそ成り立つ、不思議な状態。親しくなればなるほど、会話は最小限で済むという訳だ。初戦知り合い程度では話していないと相手が何を考えているか分からない。だから、人というのはよく話し、騒ぐのだ。自分の心で思う意思を相手にどうにか伝えたいからか、ただ単に蟠りを吐き出したいからか。

「……ん？」

不意にリックが立ち止り、疑問符をあげる。いつものような軽い表情は消え、妙に何かに集中しているようである。アイラが話しかけても返事は帰って来ず、遠くを見て何かを探すようにしており、微動だにしない。

「おい。生きてる？」

「臭わないか……？」

「……はあ？」

リックは無表情でアイラの問いにそう答える。だが、その内容と言い方があまりにも間抜け面で滑稽だったために、アイラは口をあんぐりと開けて呆れてしまう。

「ちょっとねえ……アンタ大丈夫？ 随分前から思ってたっちゃ思ってたけど、やっぱり頭……いかれてた？」

「前からはともかく、今はそうかもしれない……」

らしくもない、リックの曖昧で謎かけのような答え。別に深い意味は無く、リックは本当に心からそう思ったのだが、アイラはどうも面倒な言い草に苛立ちさえ覚えていた。

「で、一体何がどうなわけ？」

「やっぱ俺、どうかしてんのか……」

アイラが再び問いかけるが、既に耳に入っていないようである。一人自分の世界に入り、どうやら色々と考察しているようなのだが、アイラにとっては人の質問に答えないただの不届き者にしか感じられなかったようだ。

苛立ちは次々と増すばかり。

「……」

そういう訳で、不届き者には天罰を下すという結論に彼女は至った。

「舐めてるわけねえ……なら」

アイラは目をつむって、はあと大きいため息の後、右足を後ろに振り上げ、一気にリックの脛に向けて靴のつま先を勢いよく打ちつけた。

「いっでえええええ！」

突然の衝撃にリツクは冠絶の叫び声を上げる。多少大げさかと思われるかもしれないが、無防備な状態で脛蹴りを食らう、しかも靴の先で思いつきり勢いをつかられてというのはかなりの物である。数日は痛みが抜けないのはほぼ確実だろう。

「まったく暴力的な……お前、普通いきなり脛蹴るって——」
「アンタ剣でぶった斬られなかったただけでも感謝したらどう？
で、何がどうなんだってのか聞いてんだけど!？」

リックは言い返そうと大きく口を開こうとするが、いざ言おうという時にアイラが詰め寄りつつ、の右手が刀の柄のほうに添えられるのを確認する。表情はこれでもかという程笑顔であり、余計恐ろしさを倍增させる。

「……まあいいか。で、さっきからどうも臭うんだよ」

鼻をくんとさせながら、リックはそう答える。鼻の良さははいい今までの旅で培われて来たものらしく、リックに言わせると旅では鼻が強いと、色々と便利な事が多いらしい。

「それは分かってんの。何の匂いかって聞いているのよ」

リックは質問には答えた。答えたのだが、数秒の沈黙の末に、ゆっくりと慎重に口を動かした。もしこの言葉が本当ならば、今の状

況がやっと動くという事なのだ。

その衝撃的な言葉に、アイラは驚きを隠せなかった。

「……人の匂いがすんだよ」

そしてリックはその匂いに方向に向かって走り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4251n/>

忘れられた物語 † The forgotten story †

2011年11月16日11時08分発行